
天使の仕事（旧）

アオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の仕事（旧）

【Nコード】

N8570S

【作者名】

アオ

【あらすじ】

こんにちは、天使です。

よく天使は死んだ人の魂を霊界に連れて行くのが仕事と言われていますが、別にそれだけが仕事と言うわけではありません。一日にたくさんの人が死んで、その魂を霊界に連れて行く、それだけでも大変なのに他にも仕事があるととても大変な役職です。

このお話はそんな大変なお仕事をしている私、天使名「アオイ」の物語です。

——天使の仕事をシリーズ化させました。

ここで出てくる天使は別に神話とかそういうのに沿った設定ではなく、さらに言う中途半端な知識がいろいろとこちゃまぜな感じになってます。もし出して欲しい天使だとか設定だとかがありません。たら感想にて言ってお下さい。一応出す努力はしたいと思ってます。あと、客観的に見て面白いかどうかとも知りたいので小説についての感想も書いて頂けるとありがたいです。

注：初めて読まれる方はこちらの『天使の仕事（旧）』ではなく、『天使の仕事』を読まれることをお勧めいたします。

天使の仕事 1 - 1 (前書き)

はじめまして、アオです。

初投稿＆初執筆なのでいろいろと至らないところがありますがよろしく願います。

文章やその他諸々で何かご指摘ございましたら是非教えてくださ
い。

あと、作者は割りと中二ですのでその所もご了承下さい。

天使の仕事 1 - 1

「さうで、今日も張り切って仕事しますかー」

そう言つて私、『アオイ』は今日も“人間界”へ足を運んだ。

足を運んだと言つても別に歩いてゐるわない。背中には羽があるのだから当然それを使つてゐる。

ちなみに、天使の仕事は一般的には死んだ人の魂を霊界に連れていくと思われているが他にも仕事はある。成仏できない霊を成仏させてあげたりとか（成仏できない霊は何か心残りがあつて浮幽霊となつてゐるので、心残りを解消することによつて成仏させる）“人間界”の問題事に首を突っ込んだりする等いろいろ忙しい。でも私は下っ端の天使なので死んだ人の魂を霊界に連れて行くのが主な仕事である。

「おやつ、あれは」

そうしてふよよと飛んでゐると私の目にある一人の人間とまった視線の先には一人の少年。年は、16才。急いでゐるのか、その少年は赤信号なのに道路に飛び出し、走行中の車に撥ねられてしまった。少年は吹っ飛び、地面に体を強く打ち付けて死んでしまった。

「ふう、まったく何をやってるんだか」

そう言つて彼の目の前まで飛び、いつもの台詞を言った。

「はい、天使です」

俺は急いでいた。

——早くしないと間に合わないかもしれないから。

だからとにかく一生懸命走つていた。

そうして走つてゐると、横からクラクションの音が聞こえ、そこで俺は今赤信号で飛び出していることに気づいた。しかし気づいたと

きにはもう遅く、横から来た車に撥ねられて吹っ飛ばされた。

——まだ死ぬわけにはいかない

そう思い、必死に意識を総動員させ意識を保とうとしたが、無防備な所を撥ねられて、思い切り体を地面に打ち付けた体は血まみれでどう抗っても？死？という運命からは逃れることが出来なかった。

そうして、必死に総動員させた意識も散り散りになり、血を流し続けて肉体も活動を停止し始めて、死ぬ前の一瞬で謝罪をして、

——俺は意識を失った。

意識を失ったあと、妙な浮遊感を覚えたのでふと目を開けてみると、

「はい、天使です」

背中に純白の翼をつけた妙な女がいた。

「はい、天使です」

そう言つて彼の顔を見ると、見事に固まっていた。

「ちよつとー、無視は無いんじゃないの無視は」

すると彼はハッとして私に警戒を示した。

「誰だお前は」

「私？さつき天使だつて紹介したじゃない」

「ふざけるな、天使なんて普通の世界には存在するわけないだろう」

「それはあなたの主観でしょ。実際に私はここにいる、それが全てよ。それにここは普通の世界でもないわよ。ここはあなたのいた世界であつて、違う世界なの」

「違う世界？じゃあここはどこだつて言うんだ」

「そうね、じゃあ分かりやすく説明するためにも後ろを向いてくれない」

そう言つと彼は後ろを向いて驚愕した。

「なつ、俺がいる！？」

「そう、あなたはさつき車に撥ねられて死んだの」

「俺が、死んだ？」

そう言う彼の顔は若干青かった。

「そう、そしてここは死後の世界、リバースワールド 反転世界」

「反転世界？」
リバースワールド

「反転世界ていうのはいわゆる死後の世界のことよ。死んだ人は魂となつてこの世界に来るの。そしてここにきた魂を天使が霊界に連れて行くのよ」

説明を終えると自分が車に撥ねられる経緯を思い出したのか、若干顔を歪めた後彼は警戒を緩めて私を見た後、もう一度自分の？死体？を見ながらつぶやいた。

「そうか、俺は死んだのか」

「ええ、そしてこの世界に来たあなたの魂を霊界に連れて行く天使、それが私。理解してもらえた？」

そうして彼は私に向き直つて「ああ、理解したよ」と言つた。

「じゃあさつそくあなたを霊界に「待つてくれ」何？」

「ちよつと待つてくれ天使。俺は、まだ死ぬわけにはいかないんだ」

「だからあなたはもう死んでるのよ」

「頼む！俺はあいつに会わなくちゃいけないんだ」

そう言つて彼は私に頭を下げた。

「天使、頼む」

「アオイよ」

「えっ？」

「私の名前、天使じゃなくてアオイ。そう呼ばないようお願い聞いてあげないわよ」

「あ、アオイ。ありがとうアオイ」

「ふう、まあこれも私の仕事だしね。それで、あなたの願い事はなに？」

「へえ、なるほどね」

そう言つて私は腕を組んで考え始めた。

彼の話はこうだ。

彼には彼女がいるらしい。（そこで少し惚気られた）そしてその彼女さんは体が弱いらしく、ずっと入院生活をしていてつい先日病氣にかかってしまい、もう長くは無いとの事。そしてついさっき彼女が突然苦しみだし、その連絡を受けた彼は急いで病院に向かった、そして撥ねられて死んでしまったという状況だ。

なるほど、だから最初はあるなにピリピリしていたのか。

「なんでそこで死んじゃうかなー」

「うっ」

そう言うとは彼は少し凹んだようだった。

恋は盲目というけどさすがにもう少し周りを見ろと言いたい。死にそんな彼女の所に行く途中で撥ねられて死んでしまうなんて笑えない冗談である。しかも撥ねてしまった人は警察に捕まり裁判にかけられて罪を問われてしまう。彼の行動は彼女のためとはいえないいろいろな人に迷惑を掛けた。私は恋をしてもそんな事にはならないようにしたい。…まあ、相手がいないんだけどね。

あ、そういえば

「ところであなた、名前は何て言うの？」

そこで私はまだ彼の名前を知らないことに気づき、名前を聞いた。

「俺？ああ、そういえばまだ名乗ってなかったな。俺の名前は桜井直人、別に好きに呼んでいい」

「じゃあ桜井君、あなたは死んだ時に割りと多くの人に迷惑を掛けたわ。そのことで霊界でなにか言われるかもしれないというのをとりあえず頭の片隅にでも入れときなさい」

「わ、わかった。ちなみに俺はそれで地獄に行ったりとかするの？」

そう聞いてきた桜井君の顔はかなり本気^{マジ}だった。

「別にそこは心配しなくていいわ。あなたは生前特に悪いことはしてないみたいだから地獄行きにはならないわよ」

「そうか、よかった」

ほう、と安堵の息を漏らす桜井君。

「ほら、そんなことより早く彼女さんのところに行きましょう。早くしないとあなたと同じになるわよ」

「お、おう。そうだった。早く急がないと」

そうして私は飛んで、彼は走って病院に向かった。

「って、はええよお前！飛んでいくとかずるいだろ！」

「何言ってるのよ、せっかく羽があるのに使わなくてどうするのよ」

「だからってお前……」

「ところで桜井君はなんで止まっているの？」

「そんなの赤信号だからに決まってるだろ」

なにを言っているんだというような顔をする少年、桜井直人^{バカ}。

「……その心がけは立派（世間一般では普通です）だけど今のあなたは霊体なのよ、こっちがあっちを認識は出来ても触れないけど、あっちはこっちを認識できないうえに触れないのよ。つまり、車は桜井君の体をすり抜けるっていうこと」

「……」

黙り込む桜井君

「い、いや知ってたよ。知ってるに決まってるだろ。ほら早く行くぞ」

そんな苦しいことを言いながら彼は進み始めた。

——ちなみに彼はあらゆるものが自分の体をすり抜けるという状況に少し気味悪がっていた。

「ここがその病院？」

「ああ」

言うや否や彼は病院の中に入り、迷うことなく病院の中を走り彼女の病室の前までやって来た。

「入らないの？」

「少し、緊張してな」

「大丈夫よ。この先に霊体の気配はしないわ」

「そうか、ありがとう」

そう言つて桜井君は病室へと入つていった。

―― 部屋の中には一人の少女が寝ていた。

それだけなら普通だが、周りに装飾異音が施されていた。

少女は苦しそうに呼吸をし、その体には管が刺し込まれていて、口にも風邪を引いたときにつけるような物ではないようなモノがついていた。

それを見た桜井君は彼女の傍まで駆け寄つた。

「麻衣、麻衣、大丈夫か！」

彼女の名前は麻衣と言うのか、麻衣さんは苦しげに呼吸を繰り返してとてもじゃないが大丈夫そうでは無かつた。それに、麻衣さんを視ても命が残り少なかつた。

そして少女の横では白衣を着た男と看護婦が話していた。

―― 二人はこんな話をしていた。

「この子も残りあとわずかだな。この子の親戚は誰も来ないがどうしたのだね」

「それが、麻衣ちゃんには家族がもういなくて」

「それでは友達や知り合いは？ 一人でなんてあまりにも寂しすぎる」

「彼女には彼氏が出来たのですが、まだ来てません。先程連絡したのです」

「くそ、その小僧は何をしている。彼女が死にそうだというのに」

―― これから少しやりたい事があるので二人にはここから離れてもらおう。

私は【魔術】を使い、二人に部屋から退出してもらつた。

「麻衣ちゃんの彼氏にもう一度連絡してみます」

「ああ、わかつた。私も少し用があるのでここを出る」

「わかりました」

―― そうして二人は病室を出て病室の中は3人だけとなつた。

「麻衣、麻衣、返事をしてくれ」

―― 後は桜井君に協力をしてもらふことにしよう。

「桜井君、ちよつといい？」

「！なんだよ、アオイ。まさか麻衣を」

「別に麻衣さんに危害を加えたりはしないわよ。ただ、あなたに協力して欲しい事があるの」

「今の桜井君の声は麻衣さんには聞こえない。だって、彼女は生者、あなたは死者だもの。でもねあなたがそうやって彼女に話しかけ続けるとなあなたの声が彼女に届いちやう。そんなこゝ俺の声が舞いに届くならそれでいいじゃないかよ！」落ち着いて。今のあなたの声が聞くには？あなたと一緒に？の状態にならなくてはならないの。この意味、分かるわよね」

そう言々と桜井君はいくらか冷静になれたのかハツとした表情になった。

「言ってることは分かった。でも、どうして俺が話しかけると麻衣は？一緒になる？んだ？」

あえて？死ぬ？という言葉は避けたのだろう。しかしその顔はまだ諦めていなかった。

「いい、今の麻衣さんは大分弱ってる、それは桜井君も分かってるわね。それでね、そんな状態の麻衣さんに桜井君が？声が届いて欲しい？と願って話しかけると、弱っている麻衣さんはそれに引つ張られちやうのよ。つまり簡単に言くと、生と死の狭間の辺りにいる生者麻衣さんに死者桜井君がこっちに来いと言ってるようなものなのよ。普通の霊がそんな事をやっても引つ張る力は弱いでしょうけど、桜井君は麻衣さんの恋人。引つ張る力が普通より強いよ。それとも、桜井君は麻衣さんを？こっちに呼びたいの？」

「そんなわけ無いだろう！」

「でしょうね、だったら？その方法？での呼びかけはやめましょう」

「だったらどうすればいいん、おい？その方法？ってことは他に方法があるのか」

「あるわよ」

「だったら、その方法を使ってくれ！頼む！」

「それはいいけど、その前に一つ聞きたいことがあるんだけど。そ

れに答えてくれたら私も協力するから」

「そんな事でいいんだったら！」

「・・・じゃあ聞くけど、桜井君は麻衣さんにどんな話をするの？」
「えっ？」

そんな質問は予想外だったのだろう。少し放心したような表情をする桜井君。

「どういうことだ？」

「簡単よ、あなたは彼女に何を話すの」

「だから、どういう意味だよ！」

「あなたは彼女に死んで欲しくないと思ってる？」

「あたりまえだ！」

「そう。そういえば彼女には家族がいなくてすってね、家族はどこにいるの？」

「そんな事、今は関係ないだろ！」

「いいから答えて」

答えを催促すると若干いらした声での答えが返ってきた。

「麻衣には、家族はいない。何年か前に死んだらしい」

「そう」

「これで満足か？だったら早くやってくれ。これ以上麻衣の辛い過去に踏み込むな」

「まだよ、まだ満足はしていないわ。それに、私は彼女の辛い過去に踏み込んだけど、あなたはその辛い過去を掘り返そうとしてるのよ」

「なんだと！」

「さっき聞いたわよね、彼女と何を話すのかって。桜井君あなたは彼女に死なないでくれと言うの？両親はおるか、彼氏まで死んだ人に」

「なっ」

「そうよ、桜井君。あなたは死人なの。？あっち？に絶対手が届かないに所にあなたはいるのよ」

「あ、あ」

「あなたは彼女にこんな事を言うの？<麻衣、死なないでくれ。俺は死んでしまったけどお前は生きてくれ>と」

「そんな、こ、と」

「？死者？は生者と交わることが出来ない。でもね、その逆は可能よ」

「そ、それは」

「？生者？が？死者？となる。つまりは死ぬってこと」

「う、うわあああああああああ！！」

「落ち着いた？」

「ああ」

「それで、どうするの？」

「ああ、ちよつと聞きたい事があるんだけどいいか？」

「何かしら」

「天使は人の寿命が分かるのか？」

「まあ、大体はね。でも、完璧にじゃない。もうすぐ死ぬって視えてるのに、ふとしたことで死なくなつた、なんて事は割りとあることよ」

「そうか。じゃあさ、麻衣はアオイの眼にどう映る？」

「明日、かしらね」

「わかつた、少し、考えさせてくれ」

「わかつたわ。でも、夜になったら帰ってきてね」

「ああ」

そついい残して病室を出る桜井君。

この部屋にいるのは私と麻衣さんだけ。

その間に私は麻衣さんにある仕掛けを施す。

——さて、後は桜井君の帰りを待つだけだ。

天使の仕事 1 - 1 (後書き)

次回予告

アオイ「どうもアオイです」

アオ「作者のアオです。ここでは次回予告みたいなのを展開しようと思っています」

アオイ「まあ、おまけみたいなものよね」

アオ「ここは結構な力オス空間ですので、次回予告だけが見たい人は一気に下までスクロールしてください」

アオイ「力オスってどういうことよ」

アオ「そのままの意味だ、現に話がまったく進んでいない」

アオイ「じゃあ、話を進めましょうか。え、とまずは作者のアオから皆様に言いたいことがあるそうなので聞いてください」

アオ「このたびは皆様、真に申し訳ございませんでした」

アオイ「・・・なにについて謝ってるの？」

アオ「何についてって、お前。自分にはそんなに謝ることなんて無いぞ」

アオイ「あるでしょ。例えば、こんな駄文を公表してすみません、とか、話が長すぎてすみません、とか、人として生まれてきてごめんなさい、とか」

アオ「二つ目！二つ目！二つ目について謝ったの！あと少しだけ一つ目・・・」

アオイ「話が長すぎるってヤツ？確かに長いわよね」

アオ「はい、本当は一話目は一話で終わらせるはずだったのに、書いてたら一万字近くまでいってしまったので、二話に分けるという事にしました」

アオイ「それでも五千字以上あるわね」

アオ「はい、うまくまとめようとしたらそれくらいの量に」

アオイ「たいして文章力も無いっえ、だらだらと長い文章を書くて、駄目じゃない」

アオ「本当にすみませんでした」

アオイ「もうここまで来たら仕方ないわ、さっさと終わらせて文字数を増やさないようにしないと。あとは読者の人たちの心の広さに期待するしかないわ」

アオ「そ、そうだな。それでは次回」

アオイ「天使の仕事1-2」

「「お楽しみに！」」

——舞台裏にて

アオイ「あれ次回予告なのに全然やってなかったね」

アオ「そうだったか？」

アオイ「ねえ、あれって次回のタイトル言っただけじゃなかった？」

アオ「あつ」

アオイ「あと謝罪」

アオ「言わないで」

アオイ「・・・次はちゃんと予告しましょう」

アオ「うん・・・」

天使の仕事 1 - 2 (前書き)

こんにちは、アオです。

前回あとがきでもう少しうまくまとめると書いたのに気づいたら1万字近くまで書いてしまいました。もうこうなったらこれで掲載するしかない、とアホな考えに達しせいで今回は文字数が多いです。すいませんでした。

天使の仕事 1 - 2

俺は悩んでいた。

原因はさっきアオイに言われた言葉だ。あの言葉が俺に深く突き刺さり悩ませている。

「どうすればいいんだ」

麻衣に生きてもらったら、過去の傷を俺が掘り返すことになり、傷ついてしまうだろう。しかも、麻衣が傷ついたとき一緒にいて慰めたのは俺だ。俺が死んでしまったせいで麻衣が傷つく。そんな事実には俺は自分で自分を呪ってやりたい気分だった。だったら、麻衣が死んだらどうだろう。

それはだめだ。これは俺の我侷だが、それでも俺は麻衣には死なないでもらいたいと思う。

地獄 天国
生か死か。

なんて皮肉。死んだほうが楽で、生きていた方が辛いだなんて。

そもそも、俺が麻衣に生きて欲しいと言ったところで、麻衣が地獄生を取るとは限らない。

ならばいっそ、麻衣には何も言わずに死んで貰った方がいいか？そうすれば、俺と一緒に“霊界”とやらに行ける。それで万事解決だ。

ポツ ポツ

「雨、か」

この雨は今の俺の心境を表しているようだった。そういえば、と思い出す。

「麻衣と会ったときも、こんな雨の日だったっけな」

—— 3年前

両親が離婚して俺は荒れていた。

その日も喧嘩して、空しい空虚感を胸に抱きながら雨に打たれて帰路についていた。

そこで麻衣と出会った。

麻衣は学校で不良のレッテルを貼られている俺にかまわずに話しかけてきた。

――風邪ひくよ

――うるさい、お前には関係ないだろ

――関係あるよ、だって心配なんだもん

――そんなの、お前の勝手だろ

――そうだね。でも、風邪を引いて欲しくないから傘貸すね

――いらねえよ

――お願いだから受け取って

――そしたら今度はお前が雨で風邪引くだろう

――優しいんだね、桜井君は。でも大丈夫、もう1本あるから

――別に優しくなんか無い。とにかくいらない

――そう言つて俺は麻衣から逃げるように走った。

――次の日、麻衣が学校の校門で俺を待っていた。

――おはよう

――・・・

――昨日は大丈夫だった？

――・・・

――風邪、引かなかった？

――そう言う麻衣の顔には少し疲れが見えていた。

――昨夜余り寝ていなかったのだろう。

――どうしてここまで俺を心配するのか、俺には全然分からなかった。

――ねえ

――・・・引いてねえよ

――えっ？

――風邪なんて引いてねえよ。引いてたら学校なんて来るわけねえだろ。

――そう、よかったあ

――そうして安心して力が抜けたのか、麻衣はふらりと揺れて倒れそう

になるのを、俺が止めた。

——おい、どうした

——ちよっと、疲れちゃった

——そう言つて俺の腕の中で寝始めた麻衣を保健室へ運んだ。

——あれ、ここは

——よう、起きたのか

——えっ、桜井君！？

——なにをそんなに驚いてるんだ

——だって、ここ保健室だし、桜井君は近くにいたし。ってそう
だ、授業は？！

——ばっくれた

——何言ってるの桜井君。授業はちゃんと受けなきゃ

——授業なんて面倒くさいもの受けてられるか。そんなものより、
俺は俺の腕の中でいきなり気を失つたお前の方が重要だったんだ

——そ、そんな

——そこで赤くなり始める麻衣

——おい、何で赤くなる

——だって、嬉しいんだもん

——何が嬉しかったんだ

——秘密！そんなことより、桜井君、ここまで運んで来てくれて、
さらに看病までしてくれてありがとう

——別に、たいしたことじゃない

——いいの、これは私が勝手にしてることだから

——そうか、だったらお前の好きなようにすればいい

——そう、だったらこんなんじゃないからいっぱいお礼
するね

——それから麻衣は俺によく話しかけて来た。俺も最初は適当な受け答えや無視ばかりしていたけど、だんだんと、麻衣と喋るようになった。

——ある日の放課後

—— ねえ、桜井君

—— なんだ

—— 最近は余り無いけど、なんで前まで悪いことやってたの？

—— それは、

—— 別に、言いづらいことだったら言わなくていいんだよ

—— いや、いいんだ。俺は、お前にだけは聞いて欲しい

—— そう

—— 言って麻衣は少し真剣な面持ちをした

—— 俺の両親さ、離婚したんだよ。昔は仲が良かったのに3年前に些細なことで大喧嘩してさ。最初は小さな喧嘩だったんだけど、だんだんと、後から大きなものになってってさ、それで最終的に離婚した。裏切られた気分だったよ、あんなに仲が良くて、それを俺は小さな時から見て育ってきたっていうのに、小さなことで離婚した。だから俺は俺が小さいときから両親が言っていた？良い子？になれって言葉と逆の事をして反発してたんだ。つまり、俺が？悪い子？になったのはお前達が離婚したからだ、ってさ。

—— そうだったんだ、ごめんね。嫌な事思い出させちゃって

—— いいんだよ、俺も言っですつきりしたから。それに、俺がどれだけ幼稚なことをしていたのか確認できたから

—— そう。ところで桜井君、なんで、今の話を私に話してくれたの？

—— いきなり、そんなことを言われた俺の頭はフリーズして、動き出した時にある一つの言葉が浮かんだ。

—— ああ、その理由は簡単だ

—— 簡単な理由なの？

—— そう言っている彼女の顔は若干残念そうだった。

—— ああ、お前が好きだから。だから聞いて欲しかったんだ
—— そう言うと、彼女の顔は残念そうな表情から一転、嬉しそうな顔になり、そして真っ赤になった。

—— しかし、彼女はハッとした後、顔をぶんぶん振って真剣な表情に

した。

—— 今のは、告白ととってもいいの？

—— ああ、むしろそうとって貰わなくちゃ困る

—— じゃあ、その申し出は受けることは出来ない

—— なんてだ？

—— 俺はどきどきしていた。自分の告白の答えがNOだったのだ。その理由を聞く時の緊張は計り知れない。

—— あなたのご両親が仲直りしないと、私はあなたと付き合うことなんて出来ない

—— なんてだ？

—— だって、そうじゃないと桜井君が悲しいじゃない

—— でも、もう復縁だなんて無理だ

—— どうして？

—— もう3年前に離婚したんだ。しかも3年間両親は一度も会ったことが無いんだぞ

—— そんなの関係ないよ

—— 関係ない？

—— 人は生きてる間は無限の可能性を秘めているんだよ。その可能性の中に桜井君の両親が復縁するという可能性は絶対にあるはずなの。それなのに先を見ないで諦めるのはやってはいけないことよ

—— 無限の、可能性

—— そうよ、だから、私も手伝うから、一緒に桜井君のご両親を仲直りさせよう

—— そうして俺の両親は麻衣の助けを借りて両親を復縁させることが出来た。ついでに仲直りさせた後になし崩しで麻衣が自己紹介をするときに俺の彼女だと言ってくれたときは本当に嬉しかった。

—— それから二人で頑張って勉強して（実は俺は割りと成績が良く、頑張ったのは主に麻衣だけだが）、それで一緒の高校に受けてそして受かった。

—— あの時の麻衣は本当に嬉しかったらしく、30〜40分くらい泣き

続けた。（余談だがクラス発表で同じクラスだったときには10分も泣いた）

けど、麻衣は元から体が弱いせいでせっかく同じ学校に受かったというのに、学校には余りいけずにいた。1年の時はなんとか進級できたと言えるくらいに出席日数と成績が危なかった。

けれど麻衣は口癖として良くこんなことを言っていた。

「私は体が弱いから、代わりに心を強くしてるの」

その言葉どおり麻衣は弱音は吐かなかった。

例えばどんなに酷い頭痛でも笑って見せてどんな障害が待ち受けていても決して挫けなかった。

その強い心のおかげで、俺は救われ、麻衣もここまで来れたんだ。

「——そうだ」

麻衣は諦めるわけが無い。例えば俺が死んでいたって、一人でも頑張っ
つていける。

——だつて麻衣は

だけど俺は、麻衣の強さだけに頼るわけにはいかない。

俺は男なんだから、あいつに頼られるくらいじゃないとだめだ。

——あいつは

それに俺は、麻衣が好きだから絶対に諦めない。

だったら何故お前は自分では何もしようとしない。他にあるはずだ、
方法が。

麻衣は言っていた。生きてる人には無限の可能性がある、と。今の
俺は死者だ。生者じゃないから切れるカードは少ない。だけど、俺
にはまだ切れるカードが残っている。そう、手札にはまだ天使が残
っている——！

——俺の大切な人だから！

大切なら守って見せる桜井直人。

お前の彼女、麻衣は心は強いがとても脆い子だろう。

選択肢が二つそのどちらも選べないなら作れ！^{新たな可能性}第三の選択肢を！

「そうと決まれば」

俺は病室へと走った。

麻衣と一緒に生きるために

麻衣さんは寝ている。来たときとは違い、今は健やかに寝息を立てている。

——さて、もうそろそろ来るかな

外を見るともう暗く、時計を見ると7時を過ぎていた。

そんな時、霊体が近づいてくる気配を感じた。

——帰ってきたようね。さて、答えを聞きましょうか

そうして部屋に戻ってきた彼に質問を投げた。

「それで、桜井君どうするの？彼女には何も言わずにそっとしておく？それともメールを送って独り寂しく生きてもらおうよう説得する？」

私はわざと桜井君を挑発するように言った。

「俺は、麻衣と話して病気に負けないように言う」

「そう、でもそれで果たして麻衣さんは助かるのかしら」

「そこでアオイ、手を貸してくれ」

「いいけど、何？」

「なんとかして麻衣が死なないようにしてくれ」

「それ本気？私がそんな事出来ないって言ったらどうするの？」

「その時はその時だ。別の方法を考える。それで、出来ないのか？」

「出来なくは無いわね。でも、完璧じゃなくて生存率が上がるっただけだね」

「それでかまわない」

「あら、そう。じゃあ、あなたは彼女に独りで生きていけっって言うのね」

「そんなことは言わない」

「？どういう事」

「アオイ、俺に手を貸してくれ」

「さつきも良いつて言っただじゃない」

「もう一つ、頼みたいことがあるんだ」

「・・・何かしら」

「俺を生き返らせてくれ」

「はあ？あなた、何言ってるの。生き返らせてくれ？さつきも言っただでしょ。？死者？は？生者？と交わることなんて出来ない。？死者？から？生者？だなんて以ての外よ！」

「頼む、アオイ手を貸してくれ」

「・・・桜井君。一つ聞いていい？」

「何だ」

「何で急に生き返らせて欲しいなんて言っただの？」

「麻衣が独りで生きるか、死ぬかなんて選択肢を俺は認めない。他人に頼るしかないなんてとてつもなく情けない話だけど、それでも俺は諦めたくは無いんだ」

「つまり、桜井君は」

「俺は麻衣と一緒に生きる。どんな形でもいい俺は大切な人と、愛する人と一緒に居たいんだ」

「そう」

よかった。桜井君は答えを見つけることが出来たんだ。

極限状態の中でそれでも諦めないでこうして第三の選択肢を見つけた。

その事に私はとても嬉しい気持ちになった。

「わかったわ」

「えっ？」

「さつき、どんな形でもいいって言っただわよね。だったらその願い、叶えてあげる」

「ほ、本当か？！」

「もちろん。さあ、早速やりたいから私の手を握って」

「は？」

「手よ。手を握って、って言っただの」

「いや、え？」

さつきから間の抜けた顔で間の抜けた返事しかない桜井君。喧嘩売ってんのかしら。

「何？もしかして桜井君は女の子の手も握れないようなチキンだったの。もしかして、生前はキスどころか麻衣さんの手を握ったことが無いなんて言わないわよね」

「んなわけあるか！手を握るのだってキスだって何回もしたことくらいあるわ！」

「へへ、何回も」

「う、うるさい、そんなことどうでもいいだろ。わかったよ手だな、手を握ればいいんだな」

そういつて桜井君は私の手を握ってきた。

「桜井君て手が早いよね」

「お前が言っただろうが！」

「ふう、まあ冗談はほどほどにして。それじゃ桜井君、次に自分をイメージして。強く、強くイメージして」

「わ、わかった」

そういつて桜井君はぎゅつと目を閉じた。

桜井君がイメージしたものが私に流れてくる。

自分をここまで強くイメージ出来るといふのは少し驚いた。

足りないイメージは私が補完する。

手を前に出す。

さあ、始めよう。

「――聖術」

空間を指定

空間とイメージを同調させる

頭の中のイメージを映す

空間を侵食させる

指定された空間が私のイメージに塗りつぶされる

空間が輪郭を持ち始める

—— 持ち始めた輪郭は人の形をしている

—— イメージが空間を侵食し尽くし、そこには桜井直人立っていた

「終わったわ。もう普通にしていいわよ」

そういうアオイの顔にはうつすらと汗が浮かんでいた。

「なっ、俺がいる!？」

「そうよ、これは桜井君の映像。そして? あっち? の人達にはちゃんと見えるわよ」

「何をしたんだ、アオイ」

「これはね、聖術って言って空間に自分がイメージしたものを実体化させる術。でもこれには強い集中力とイメージが必要で、だから桜井君にも手伝ってもらったの」

「そ、そんなすごいことが出来るのか、アオイは」

「別に私だけじゃなくて他の天使も皆出来るけど、まあそんな事はどうでもいいわ。それより、今だったら桜井君の言葉は麻衣さんに伝わるからさっさと話なさい」

「分かった」

すっ、と息を吸う

『麻衣、起きてくれ麻衣』

「え、直君?」

『そうだ、麻衣遅れて悪かったな』

「な、直君いつからそこにいたの?」

『まあ、ついさっきからだ』

「そうなんだ、気づかなかったよ」

『そりゃ、寝てたんだから気づくわけ無いだろ』

「あはは、それもそうだね」

『麻衣、少し、じゃないな、とても大事な話があるんだ。聞いてくれるか?』

「わ、分かったよ」

そうして居住まいを正す麻衣さん、桜井君はそれをじっと見ていた。

「それで、とても大事な話って何かな」

『ああ、それはな・・・』

バタバタ バタバタ

『おい、さっき運ばれてきた重症患者はどうなった？』

『残念ながら、もう・・・』

『そうか、患者の名前は？』

『？桜井直人？です』

『桜井直人だと・・・麻衣ちゃんの彼氏か』

『麻衣ちゃんというのはあの・・・』

『ああ、そうだ』

・・・廊下が騒がしい、どうやら桜井君のカラダはここに搬送されていたらしい。

それにしてもタイミングがいいのか悪いのか。

私はチラリと麻衣さんのほうを見ると表情が固まっていた。

しかし、持ち直したのか、桜井君のほうを見て自分の問いを投げた。

「直君、今のつて」

その顔は全てを理解しているが、それでも信じられずに最後の希望に縋るようだった。

『ああ、実は俺さここに来る前に事故に遭っちゃってな』

「そんな！直君、体は大丈夫なの？！」

『おい、そんなに興奮するなつて』

桜井君が麻衣さんを落ち着かせようとしたおかげで麻衣さんは少しは落ち着いたようだった。

『さつき、医者が言ってただろ。俺はさ、もう死んでるんだ』

「そんな、直君はここに居るじゃない」

『麻衣、お願いだ俺の話を信じてくれ』

「だ、だって、そんな」

そうしてうるたえていた麻衣さんだが、『頼む・・・』その言葉で意を決したように桜井君を見た。

「じゃあ、今の直君は幽霊さん？」

『そうだ』

その言葉で麻衣さんは一瞬息を詰ませたが、すぐに持ち直し
「じゃあ、直君は幽霊になっても私に会いにきてくれたんだ」

『ああ、そうだ』

そこで落ちる沈黙。しかしそれを破ったのは麻衣さんだった。

「直君、どうして死んじやったの？」

『麻衣が急に苦しみだしたって聞いて俺、居てもたつても居られなくて、それで急いで病院に向かったら赤信号で車に撥ねられたんだ』

「あはは、おつちよこちよいだね、直君は」

『ああ、本当にな』

そこで笑いあう二人

「そっか、じゃあ直君、先に行って待つて。私ももうすぐ行くから」

『麻衣、頼みがある』

「何？まさか、生きてくれて言うの」

『ああ、そうだ』

「なんで？直君は死んじやって、私はもう一人ぼっちなんだよ。私の命だつてもう残り僅かなんだから別に良いでしょ」

『頼む、麻衣』

「直君はズルいなあ。一人だけ先に死んじやって、私には死なないでつて言う」

『頼む』

「本当にズルいよ、そんなに必死にお願いをされたら、私が断れるはずなんて無いのに」

『じゃあ』

「うん、でも直君あつちで浮気なんてしないでね。そしたら私直君のこと呪っちゃうから」

『それは怖いな』

笑いあう二人。さて、じゃあ私も参加するかな。

「その心配は不要よ、麻衣さん」

「えっ、誰ですか？」

突然の私の登場に驚く麻衣さん。

「私？私は天使」

「天使、さん」

「そうよ、今からあなた達二人の願いを叶える天使よ」

「え、二人の願いつて、直君と私？」

「そうよ、麻衣さんの願いは桜井君の願いを叶える。つまり、生きたいって事よね」

「そ、そうですけど」

「じゃあまずその願いを叶えましょう」

そう言つて私は彼女にメスを渡した。

「これは」

「そのメスに強く思いを籠めて。生きたいと、病気を無くしたいと」

「は、はい」

そうして彼女は両目を閉じて集中し始めた。

すると、先ほど施した仕掛けのおかげで集中してから1分ほど経過した所でメスが淡く光りだした。

「もういいわよ」

そうして彼女からメスを受け取つて【妖術】を開始した。

「籠められている思いよ、私に力を貸して」

絶対に成功させるために私は入念に術を行使した。

「妖術、思いよ、力に」

そう言つて私は彼女の体をメスで切りつけた。

『おい、アオイ！何をするんだ』

今まで黙つて事の成り行きを見守つてきた桜井君が私を怒鳴りつけた。

まあ、それは当然だろう。何と言つても目の前で恋人を切りつけられたのだ。だけど、

「大丈夫よ、ほら麻衣さんを見てみなさい」

そう言つと彼は麻衣さんを見た。

そこには、

「あ、あれ？全然痛くないし傷もついてない」

無傷の麻衣さんがいた。

『何をしたんだ？』

「私は単に麻衣さんの病氣を切つただけよ」

『と、いう事は』

「まあ、麻衣さんの病氣はある程度は弱つたわ」

「ある程度？」

「そ。さつき桜井君にも言つたけど今私に出来るのは麻衣さんの生存率を高めるだけ。後は麻衣さん次第ね」

「と、言いますと？」

かわいく小首を傾げる麻衣さん。

「つまり、後は麻衣さんの生きたいっていう気持ち次第よ」

そう、後は気持ちの問題。麻衣さんがちゃんと生きたいって思つていれば病氣は治るけど、その気持ちが鈍れば病死するだけ。

でもただ待つのは辛いでしょうからご褒美を用意しましょう

「じゃあ、次の願い。桜井君の願いを叶えましょうか」

「え、そんな後は私の気持ちで治るんですからそこまでしてもらふ必要はありません」

「それは桜井君の麻衣さんへのお願い。桜井君は私にもお願い事をしてるのよ」

「直君、そんな。ここまでして貰うだけでもありがたいのに、まだ頼み事があつたの？」

『う、それは』

桜井君も分かっているのだろう。ばつが悪そうにしながら私を見た。
「大丈夫よ、途中で投げ出す気はないし、それにこれくらいどうって事は無いから」

「それで、直君の願い事って？」

「桜井君の願い事、それは麻衣さんと一緒に生きる事よ」

「そ、そんな事が出来るんですか!？」

「そういえば、まだ麻衣さんには確認を取ってなかったっけ。」

「さっき桜井君は?どんな形でもいいから麻衣さんと一緒に居たい?って言ったの。麻衣さんは桜井君と一緒に生きられるならそれでもいい?」

「もちろんです!直君と一緒にいたら私——!」

「そう、ところで麻衣さん、年下の人は好き?」

「え?まあ好きですけど」

「それがどうしたんですか、というような顔でこちらを見てくる麻衣さん。——だったら大丈夫よね。」

「桜井君には転生してもらっわ。最低でも1年くらいはかかるでしょうけど」

『「ええ——!!」」

「何驚いてるのよ。桜井君の体はもう使い物にならないんだから他の体を使うしかないでしょ」

「え、でも転生という事は私達の年の差とかは・・・」

「まあ、最低でも18歳位は離れてるわね」

「直君が結婚できる年になったとき私はもうおばさんなんですか!？」

「別にいいじゃない。大人になったら年の差なんてあんまり関係無くなるわよ」

『なあ、転生って事は俺は生まれ変わるんだよな。記憶とかは・・・』

「ああ、その点だったら心配しなくてもいいわ。ある程度は残すようにするから」

「・・・直君、生まれ変わっても私の事好きでいてくれる?」

『あたりまえだ。俺は今回も、そして次の人生でも麻衣を愛してる』

「わかった、じゃあ待ってるね。直君が私の所に来るまでずっと待ってるから」

『ああ、何年かけてでも麻衣の所に行つてみせる』

「その点も心配要らないわ。あなた達二人がまた出会えるように繋いでおくから」

『何から何まですまないなアオイ、本当にありがとう』

「アオイさん、私からもお礼を言わせて貰います。ありがとうございます」
「恋のキュービットあなたは私達の天使です」

「これが仕事だからね。でも、礼はありがたく頂くわ。それじゃあ麻衣さん、今から桜井君を“霊界”に連れて行きますので最後まで頑張ってください」

「はい、生きる目標が出来たおかげで私、頑張れそうです」

「そう、じゃあ桜井君、行きましょう」

『ああ、じゃあな麻衣！来世で会おうぜ！』

——— そう言い残して桜井君と私は霊界へと行った

「ふう、今回も大変だった」

そんなことを言ってる私の顔は笑っていた。

やっぱり天使は人を笑顔にするのが仕事。その仕事を果たすことが出来て本当に良かった。

それにしても、

「なんでこんな事しなくちゃいけないのよー！」

私の目の前には山のように積み上げられた書類がある。

理由は簡単、今回の仕事で“人間界”に介入しすぎたからだ。

「やつぱ、もう少し早く決断してもらえばよかった」

——— 最初に医者と看護師に退出してもらったとき、私は【魔術】を使った

それはいい、仕事で術の行使は認められているから。

問題はその後、要は使いすぎたのだ。【魔術】によって退出してもらってもそれは一時的なもの。その時間が過ぎれば医者達が戻ってくるはずなのだが、戻ってこられるとまずいので術を重ねかけた

のだ。

「まあ、魔術に妖術、おまけに聖術まで使っちゃったからなあ」

——それ以前にここまで術を使ったらペナルティーがあるのは当然

「はあ、また仕事が増えちゃったよう」

そんなことを言いながら今日も仕事に精を出した。

天使の仕事 1 - 2 (後書き)

次回予告

アオイ「はいアオイです。次回予告が始まりまーす」

アオイ「しかし！今回もまた予告の前に謝罪があるとの事です」

アオイ「では、被告人アオが入りまーす」

アオ「どうも、アオです」

アオイ「アオさん、今回の事はどう説明なさるおつもりですか」

アオ「はい、今回の文章の長さの原因は、思いの外直人と麻衣の過去の話が長引いてしまった事です」

アオイ「そんなので読者は納得するでしょうか？」

アオ「すいませんでした。それでも一応文章を削って、且つ面白く書いたのですが、今回は私の力不足でした」

アオイ「えー、アオも割りと反省してるとの事で皆さんも許してあげて下さい」

アオ「すいませんでした。あと自分には文章を縮めるのは難しいと判断したので 天使の仕事 は文章が長いという認識でお読みください」

アオイ「だからって無駄に長くはしないようにね」

アオ「もちろんだ」

アオイ「えー、では次に、今度こそ次回予告をしたいと思いまーす！」

アオ「あー、その事なんだがアオイ、まずいことが起きた」

アオイ「え、まさか」

アオ「次話の構成がまだ出来てないんだ」

アオイ「ちよつと、あんたどうするのよ！また予告しないで次話のタイトルコールだけで終わりにするつもり！？」

アオ「どうしようか？最後に出てきた書類整理の話にする？」

アオイ「嫌に決まってるでしょう！それとあなたの文章力じゃそん

なのでまともなお話を書けるわけ無いじゃない！」

アオ 「じゃあどんな仕事がしたい？」

アオイ 「楽なやつ」

アオ 「即答ですか、そうですか」

アオイ 「あっそうだ、世界観設定とかどう！？ほら、魔術とか妖術とか出てきたじゃない。それについての説明をすればいいじゃない」

アオ 「あーそれはちよつと．．．。まだ2話しか掲載してないのに世界観を出すのは早すぎかなーって。それに、魔術だとかの説明は話のネタになるのであまり書きたくない」

アオイ 「じゃあどうするの？」

アオ 「今話してて思いついたのが宅配かな」

アオイ 「宅配って事は届け物でもするの？」

アオ 「そう、それだったらアオイも楽でいいだろ」

アオイ 「でも、それをとてつもなく面倒くさくするのがアオなんだよね」

アオ 「あ、わかる？」

アオイ 「はあ、もういいわいい加減にしないとあとがきも長いって読者の人たちに言われちゃうかもしれないから」

アオ 「そうか、じゃあ次回の 天使の仕事 は宅配で決まりだね」

アオイ 「宅配じゃなくて届け物って言いなさいよ。私はクロネコじゃないのよ」

アオ 「わかったよ。じゃあ次回はアオイに届け物をしてもらいます」

アオイ 「それでは次回」

アオ 「天使の仕事 2 - 1 (仮名)」

「「お楽しみに!!」」

——舞台裏にて

アオ 「今回はうまく予告できたな」

アオイ 「まあ、割とグダグダだったけど前はタイトルコールだけだったから進歩はしたんじゃない？」

アオ 「そういえばさ、タイトルコールの時に思ったんだけど、天使の仕事＋数字のタイトルはやめた方がいいかもね」

アオイ 「あ、それ私も思った。だって今回は天使の届け物ってサブタイトルの方が絶対いいもの」

アオ 「やっぱりアオイもそう思う？」

アオイ 「てゆーか何で天使の仕事＋数字のサブタイトルでいいこうなってると思ったの」

アオ 「ああそれはね、うまいサブタイトルが思い浮かばなかったからだよ」

アオイ 「まあ、たしかに命名しづらいわね」

アオ 「あ、いい事思いついた。読者の皆さん、うまいサブタイトルが思いついたら？感想？等で教えてください」

アオイ 「何がいい事よ。結局は人任せじゃない。ちゃんと自分でも考えなさいよ」

アオ 「分かってるよ」

アオイ 「そう、ならいいわ。舞台裏はあくまで舞台裏として手早く話を終わらせないと」

アオ 「そうだね。ではさようなら。サブタイトル、お待ちしております」

アオイ 「自分で考えろー！」

——キャラ紹介に『直人＆麻衣』を追加しました。

天使の届け物（前書き）

こんにちは、アオです。

今回も気がついたら1万字書いてました。でも、読了時間を見ても1万字の文章でも20分かそこらで読み終われる量なんですよね。その、こっちが何時間も掛けて書いたのが20分位で読み終われるという現実には多少絶望しつつも何とか書き上げることが出来ました。明日は平日なので次の投稿は火曜日にはしたいです。

天使の届け物

「うーん、今日もいい天気ねー」

そう言つて私は大きく伸びをする。本当にいい天気だ。今日みたいな日は家でごろごろしていたい。

「ま、そんな事、出来るわけ無いけどね」

天使に休日なんてほとんど無い。もうちょっと、仕事をいっぱいやれば少しは余裕が持てるんだけど何分自分は仕事が遅い。とんでもなく遅い。先日の仕事だつて結局一個しか出来なかつたし。

「ふふふ、でもその後の書類整理だとかは本当に楽しかつたなー」
私は涙を流しながら、そんな事を呟いた。

だつてあの量は無いだろう。労働基準法だとかいろいろ無視している。

そりゃ、確かにあんなに術を使つたのはまづかつたけど何もあそこまで。

まあ、あんな量を押し付けられたもうもう一つの理由に心当たりはあるんだけど。

「まったく、仕事が遅いのは事実だけど。ここぞとばかりにたくさん押し付けてきて・・・」

私はいつも仕事が遅いから上の人達には若干目をつけられていたりする。

なのでここぞとばかりに仕事を押し付けたのだろう。

私の仕事が遅いのは魂の霊界までの案内だけで、他は割りと早くこなせるのだ。

——私の仕事が遅いには理由がある。

その理由は、仕事にかける時間がかなり長いからだ。私はいつも一人の魂を“霊界”に連れて行く前に、何か未練だとかが有つたらそれを叶えてあげている。

——だつて、未練があるまま消えちゃうなんてあまりにも悲

しいから

だから私は出来うる限りで、死者の未練を無くしてあげている。といつても、それで仕事が遅れてちゃ駄目なんだけどね。

「ま、とりあえず家を出ますか」

そうして家を出ると、家の前にあるポストに一通の手紙が入っていた。

「あれ、？本部？からの依頼なんて珍しい」

まあ、先日は本部からの仕事の書類整理を死に物狂いでやってただけだ。—— っていつまでも引きずってるんだ私。

しかし、？本部？からの仕事の依頼が珍しいことは事実。普通は私みたいな仕事の遅い下っ端天使に回ってくる事なんて殆ど無い。有るとしてもそれは——

「はあ、また書類整理とかをやらされるのかなあ」

そう、下っ端天使に来る本部からの仕事は主に書類整理である。毎日毎日来る死人の魂の書類を整理する。これだけを聞いて楽そうだな、と思った人。はっ倒しますよ。

天使の数は人間に比べてとても少ない。それなのに死んだ人間の魂を“霊界”に連れて行って、書類を作って、それを整理する。これは人がやるような仕事じゃない。—— まあ、人じゃないんだけどさと、まあ話が脱線してしまっただが、？本部？からの仕事なんてそんなもんなのだ。

私は肩を落としてつつ、とりあえず手紙を見てみた。

（黙読中）

「なによこれ」

手紙を読み終えた私はそんな事を言った。

手紙には、依頼があるから？本部？へと来て欲しい。くらいとしか書かれていなかった。あとはせいぜい時間指定がされているぐらい。私は時間を確認した。

「まだ時間には余裕があるわね。だったら、朝ごはんでも食べにいく」と

この3日間ろくに食べ物食べていないので、私はひとまず朝ごはんを食べることにした。
膳は急げ、私は“食堂”に向かった。

食堂

「お、やった。今は空いてるみたいね」

食堂には天使がいるが、それでもいつもの様な混雑じゃない

「さて、何食べようかなー」

私がメニューについて考えていると、後ろから声が掛かってきた。

「あ、アオイちゃん。久しぶり〜」

「あらミドリ、久しぶりね」

そこにいたのは私の友人であるミドリだった。

「アオイちゃん、ここの食堂使うのも久しぶりだよね」

「ええそうね。3日ぶり、くらいかしら」

「何があつたの？アオイちゃんが3日も食堂に来ないなんて。わたし、世界が終わると思ったたのよ」

「ちよつと、私を貶めようとししないでよ」

まったく、花も恥らう乙女に何て事を言うんだ、この娘は。そりゃ、ご飯を食べるのは好きだし、普通よりは？ちよつと？だけ多くは食べるけど、あくまで？ちよつと？だけだ。そこまで大食いじゃない。「だってアオイちゃん、いつもいっぱい食べてるでしょ。ちよつと前にやった大食い大会でも見事1位に輝いたし」

「うっ」

だってあれは、優勝者の商品が？無条件で2連休？というとても魅力的な商品だったのだ。だから意気込んで大会に出場したら優勝してしまった、というだけだ。決して、決して大食いなんかではない！「それで、アオイちゃんは何で3日も来なかったの？」
そう言いながら心配そうな顔をするミドリ。

この娘は基本的に優しい性格だ。だから私もミドリの事は好きだ。ただ、ちよつと天然な所があつて、さつきみたいに毒を吐くことも

あるけどそれもミドリの魅力だ。

「ああ、それね。実は始末書と書類整理に追われていまして」

「そついい、暗い雰囲気を作る私。それでもお構い無しにミドリは私に質問を続けた。」

「アオイちゃんが始末書？なんで？」

「前回の仕事でね、少しやらかしまして・・・」

「それで思い至ったのかあつ、とした顔をした。」

「それって、術の多量行使と？転生？について？」

「そう、あんなに書類が多かったもう一つの理由、それが転生だ。」

桜井君の魂を転生させるに当たって、強引に捻じ込んで出来る限り早く転生できるようにしたのと、転生する際に記憶の持ち込みが出来る様にして、さらには転生後の人生を少し操作するということでもないことを前回私はやってのけた。

あの書類の大半は転生のペナルティーである。

「アオイちゃん、凄かったもんねー。あそこまでお節介を焼く天使はアオイちゃん以外に多分誰もいないよ」

まあ確かに、あそこまでの天使は中々いないだろう。

何故ならその後に来る仕事ペナルティーの量が半端ないからだ。普通だったら過労死してもおかしくない量を平然とやらせてくる。

「私も知ってたら手伝ってあげたのになー」

「そんなのいいわよ、あれが私の仕事責任だからね」

「それにしてもアオイちゃんは凄いなー。随分な量を渡されたはずなのにもう終わらせちゃったの？」

「ええ、寝る間も食べる間も惜しんでね」

「凄いのよ。だって、本部の人達が仕事が減ったって喜んでたんだもん。あれ、絶対アオイちゃんに押し付けたからだよ」

「うー、何でちゃんと仕事をこなしたのにペナルティーがあるのよ」

「しょうがないよ。だってあれはやりすぎだもん」

笑顔でそんな事を言うミドリ。もう少し言葉を選べなかったのかしら。

「まあいいわ。とりあえずお腹が空いたから早く食べましょう」
「そうだね。早くしないとアオイちゃんが空腹で死んじゃうよ」
「もついいからそれは」

私はミドリの背中を押してメニューを注文しにいった。

――昼食時の事――

「おまたせー」

「あ、アオイちゃん何を頼んできたの？」

「A・B・Cの3セットとスパゲティ、あとうどんとカレー、他にもラーメン、おにぎりetc・・・」

「す、凄く食べるね」

そう言うミドリの顔は若干引きつっていた。

「まあね、3日も何も食べてないんじゃない、いつもより多く食べないと」

「そ、そう。何かわたしアオイちゃん見てるだけでお腹いっぱいになっちゃった。これ食べかけだけどいる？」

「あ、ありがとう。ありがたくいただくわね」

ミドリの食べかけのご飯をぺろりと平らげて自分が注文した料理に取り掛かる。

――その時周りでは――

「す、すげえ。あの子、あんなにあった量をもうあそこまで減らしてる」

「あ、あの子は確か大食い大会で優勝した子じゃないか!？」

「ああ、そう言われて見れば確かにあの子だな」

「あの体のどこにあんな量が入るんだ？」

「うえ、俺なんか気持ち悪きなってきちゃった」

「ああ、そういえばあの子、ここ3日間食堂に来てなかったね」

「どうしてだろうな。あの量を自炊ってのはかなりきついと思うんだが」

「なんでも書類整理だとかに追われてたんだって。ほら、3日前急に書類が減って仕事が楽になっただろ。あれ、あの子が全部押し付けたって噂だぜ」

「？本部？の奴等、あの大食い王を3日も家に閉じ込めるなんて何してやがる」

「ああ、本当だな。見ろよ、食堂の人が涙目で品切れをあの子に訴えてるぞ」

「あーゆーのは小出しに発散しなくちゃ駄目だよな」

———という会話があつたのをアオイは知らない。

「ふう、ごちそうさま」

私は出てきた料理を綺麗に平らげた。

「いっぱい食べたねアオイちゃん」

「ええ、腹八分目くらいだけどこれくらいがちょうどいいわね」

その時周りがザワツとしたけど、特に気にすることじゃない。

「さて、もうそろそろいい時間だし、私、本部に行ってくるわね」

「うん、いつてらっしゃい。お仕事頑張ってね」

「あなたもね、ミドリ」

そうして私は食堂を後にして本部へと向かった。

———因みにその後、食堂内では食器洗いと品物の追加の発注で大変だった

「さて、一体何をさせられるのか」

私の目の前には大きな建物がある。

———第三区霊界総合統一本部、通称本部

その区域にいる天使は皆、自分の区域の霊界総合統一本部の事を？本部？と言い、他の区域の天使達は皆この事は第三本部と言う。逆もまた然り。

ここにはこの区域が担当する人間界で起こった事や、魂の書類など、

たくさん情報が集められている。

本部とは図書館みたいな役割も兼ねているので、ここに来れば自分が知りたいことはほぼ間違いないと知る事が出来る。

ここは他にも人間界で言う司法や、国会、警察など、とにかくいろいろなものがある。

まあ、国会と言うよりは地方自治体みたいなものだけど。

そして、この担当区域の魂は全てここに連れて来られる。この前の桜井君の魂も当然ここにつれてきた。

あとここに居る天使達は雑用の下っ端を除くと皆強かったりする。命が惜しければ本部は敵に回しちゃいけない存在なのだ。

というわけで私はどんな仕事をさせられるのかと想像しながら本部へと入っていった。

中に入ると慌しい音が聞こえてきた。

ここはいつもの事そうなので私は受付へと向かった。

「あの、仕事を依頼されて来たんですけど」

「では、依頼状を見せてください」

受付の天使さんに依頼状を見せると、（ここに居る大体の天使は私より階級が上なのでさん付けをしている）

「はい、わかりました。アオイさんには今回届けものをしてもらいます」

凄いな、あれを見ただけで何の仕事が分かるなんて。

——もしかして、本部での仕事を全部覚えているのか？

と、そんなことより

「届け物、ですか」

「はい。今から届けて頂く荷物を取って参りますので少々お待ちください」

そう言っただけで席を立つ受付の天使さん。

私はというと、

「やった。書類整理じゃない、神様はちゃんと私を見ててくれる

んですね」

と、書類整理じゃない事に凄く喜んでいた。

——と、受付の天使さんが戻ってきた

「はい、どうぞアオイさん。これがその荷物です」

受付の天使さんの手には大量の荷物があつた。

「あの、何ですか？その大量の荷物は」

「届けて頂く荷物でございます」

どうしたのか、といったような目で見る天使さん。いや、だって

「それ幾つあるんですか」

「13個です」

13、何て不吉な数字なんだろう。私はがっくりと頂垂れた。

「わかりました。それで、何処へ届けばいいんですか？」

「この内の十個は第四本部へ、あとの三つは人間界の鈴木さんのお宅と佐藤さんのお宅へ、最後の一つは時間指定されていまして19時にあなたの家まで届けて欲しいそうです」

「私の家ですか？別に何も頼んでませんけど」

「あなたの家の前に依頼主がいるそうです」

「そうですか」

「あと、荷物は第四本部が赤、鈴木さん宅が青、佐藤さん宅が緑の印で色分けされております。あと、今日の仕事はこれだけでいいそうです。仕事が終わりましたら、そのまま家へ帰ってお休みください」

「わかりました、ありがとうございます」

そう言つて荷物を持って本部を後にしようとする、

「あ、少々お待ちください」

そう言つて何かの係りの天使さんから話を聞いている受付の天使さん。それを待っていると、

「申し訳ありません。アオイさんの荷物が増えました」

えっ！？、と驚く私。

「先ほど食堂から食材が追加で発注されまして、それをアオイさん

に運んでいただきたいのです」

—— 仕事が増えたのは辛い、終わったらもう今日は仕事が無い

だったら別にもう一つくらい——

「わかりました、いいですよ」

「ありがとうございます。これがその荷物となります」
そこにあるのは山。

「って山!？」

山のように積み上げられた荷物、もしかして——

「あのー、運ぶ荷物ってこれですか？」

「はい、その通りです」

「いや、こんなに持てないんですけど」

「分割してお運びください」

「はい」

そう言っただけで肩を落とす私。これ、いつもの仕事と大して変わらないんじゃない

—— そうして私は2時間ほど掛けて食堂への荷物運びを行った

(因みにアオイは知らないことだが、この荷物運びは全てアオイが原因である)

「—— さて、じゃあ行きますか」

手には10個の荷物。とりあえず、まずは第四本部への荷物を届けることにした。

「とりあえず、何も無ければいいんだけどねー」

しかし、何も無ければいいと思うと何かあるのが世の常。アオイも例外ではなかった。

アオイがふよふよと低空飛行をしていると、目の前に3人の幽霊に絡まれている天使がいた。

—— 会話の内容はこうだ

幽霊A「おいおい、天使さんよ。いつもいつも威張りやがってふ

ざけんなよ」

幽霊B「そうだ、俺達を舐めてんじゃねえぞ」

幽霊C「こんなによええのに俺達に偉そうにしてたのかよ」

天使「うう、」

——幽霊達にやられたのか、体には傷がついている

幽霊A「俺達はお前らと違って優しいからな、金を寄越せば許してやるよ」

——因みに何故彼らが金を欲しているかというと、

——幽霊は死んで霊界に連れて行かれると、霊界で暮らすことになる。霊界とはすなわち人間界で言う“天国”であり、ここではお金で全て解決できる。そして天使は元から給料が高い役職のうえ、さらにお金を使う暇があまり無いためにお金ばかり貯まってい

くので天使はお金持ちが多い。と言っても私のようにお金を持っていない天使もいたりするが。（私はいつも食費に消えてしまう）

幽霊B「おら、早く寄越せよ」

見れば天使の方は霊力が余り残っていないようだった。きっと仕事の後だったのだろう、無抵抗でやられていたのがその証拠だ。なるほど、霊力が無い所を襲うのはいい考えだ。きっと霊力をたくさん使うような仕事の後を狙う作戦だったんだろう。だけど、作戦にはイレギュラー
予想外というのがつきもの。私だっていつもそうなんだ。こいつらだけ無いなんてそんな事、私が許すはずが無い——！

「ちよつと、あなたたちいい加減にしなさい」

幽霊C「ああ？なんだよ」

こちらが女だからか、介入したときには多少驚いては見せたものの、すぐに元に戻った。

幽霊A「今いいところなんだよね。邪魔しないでくれるかなお嬢さん」

幽霊B「おい、こいつ結構可愛いぜ」

幽霊C「そうだな、コイツの後に相手してやろうぜ」

まったく、もしかしてこいつらは術が使えるようになり始めただけ

の初心者かしら。

—— だったら簡単に片づくかな。

「後じゃなくて今相手してもらえるかしら」

幽霊A「威勢がいいねえ。俺達をただの幽霊だと勘違いしてるだろ」

「どういうことかしら」

幽霊A「つまりは、こういう事だよ」

—— その手には一振りの鉄パイプ

幽霊A「妖術！」

男がそう言つと鉄パイプは光を帯び始めた。

幽霊B「妖術！」

幽霊C「妖術！」

最初の男に続いて二人もそれぞれの玩具に妖術を掛ける。

「へえ、普通じゃないって手品子供だましが出来るって事？」

幽霊A「この状況でも威勢がいいなお譲ちゃん。それじゃ、お望み
どおり最初に相手してやるよ——！」

そう言つて幽霊達はそれぞれの玩具で私に殴り掛かろうとしてきた。

「私に従いなさい！」

その言葉を言い終えると同時に玩具が私に触れた。

「なっ!？」

驚愕の声は誰が発したのか。男達は皆驚いた様な表情をしている。

幽霊A「どういう事だ、おい！ボンクラ！何で攻撃しないんだ！」

「当然でしょう。主人に危害を加えるなんて出来るわけないでしょ」

幽霊B「主人だと！？俺達がコイツの主人だぞ」

「ふう、口で説明するよりこっちの方が楽かな」

そうして私は妖精に語りかけた。

「私の所に来なさい」

そう言つと、彼らの手にある子達が私の所にやってきた。

幽霊C「ど、どうなつてやがる?!」

「妖精たちが私の事を主人と認めて鞍替えしたのよ」

この妖精たちは中々にいい子だ。それにしても——

「あなた達、もう少し妖精を大事にしなさいよ。こんなに簡単に鞍替えるなんて妖精にあまり好かれていない証拠よ」

こんなにいい子達が簡単に鞍替えなんてしたんだ。あいつらには本当に道具としてしか扱われていなかったのだろう。

幽霊A「おい、返しやがれ！」

「無理よ、だってこの子達も嫌がつてるもの」

幽霊B「うるせえ！さっさと返せ！」

そう言って一人の男が私に殴りかかってきた。

「ふう、——妖術」

そう言々と武器たちが私を庇った。

「ありがとう。それじゃあやりましょうか」

そうして私は武器となった妖精を従えて男達と向かい合った。

—— 5分後 ——

私の下には自分達の武器であつたモノたちにやられた幽霊達が倒れていた。

「ふう、ありがとう」

私が妖精にお礼を言々と妖精たちは嬉しそうにした。

「それじゃ、起こしちゃってごめんなさい。もう眠っていいわよ」

すると妖精たちは名残惜しそうにしたが、私にお礼を言って眠った。

「契約解除」

すると、妖精の気配が消えてそこに残ったのはただの物だった。

「あ、ありがとうございます」

すると絡まれていた天使が私にお礼を言ってきた。

「どういたしまして」

私はそう言って立ち去ろうとしたが、彼に止められた。

「あの、何かお礼をさせてください」

「礼？礼なら別に——」

いらない、と言おうとしたが私はあることを思いついた。

「それじゃあさ、この子達の面倒を見てもらえない？」

そう言つて差し出したのはさっきの男達から奪つた武器だった。

「これですか？しかし、これはあなたの妖精になつたんじゃ．．．」

「ああ、それは心配ないわ。もうこの子達とは契約を解除したからそれに、この子達を使えば多分仕事も楽になると思うし、さっきみたいに絡まれても対処できるわよ」

「そ、それはそうでしょうが。あ、そうだ。一つお尋ねしてもいいですか？」

「ええ、かまわないわよ」

「あの、この妖精たちはこいつらに従つていたはずです。なのにどうしてあなたに鞍替えしたんですか」

「ああ、それは簡単よ。妖術を使つただけ」

「妖術を？」

「そう、妖術は物に宿つた妖精を従える術でしょう。それで私はあの子達に妖術を掛けて強制的に従わせたのよ」

「あ、相手の支配下にある妖精を強制的に従わせる？！そんな事が可能なんですか！」

「可能よ。ただ、これにはある程度条件が必要で、そのどれかの条件を満たしていれば大抵は出来るわよ」

「その条件とは？」

「？相手と自分の差が圧倒的に大きい時

？妖精がその主人のことをあまり好ましく思つてない時

？相手が妖術の初心者だった時

この三つのうちどれかを満たしていればOKよ」

「と、いう事はさっきあなたはこの3つの条件を全て満たしていたんですか」

「まあ、そういう事ね」

「凄いですね、そんな事を知っているなんて」

「あなたは天使になり立てでしょ？だったら知らないのも無理ないわ」

「な、何でその事を」

「だって、この事はどの天使でも割と知ってることだもの」

「そうなんですか」

「そういう事。じゃあ、私は仕事があるからこれでオサラバするわね。あなたは家で仕事の疲れをしつかりと癒しなさい。あと妖精たちもよろしくね」

「あ、はい。わかりました。ところでこいつらはどうするんですか？」

そう言つてまだのびている男達を指差す。

「そいつらはあなたが本部にでも連れて行きなさい。そうすればお金も貰えるし、ポイントも上がるわよ」

「そんな、これはあなたの手柄です。それを自分が横取りするなんて出来ません」

「さっきも言つたけど私は今仕事中的なの。余計な荷物はもてないわ。そう、ただでさえ荷物がいっぱいなのにこれ以上荷物が増えるのはごめんだ。」

「わかった。それじゃ私はもう行くから」

そう言つて第四本部まで急いで飛ぶ。まずい、少し時間を掛けすぎた。

残された新米天使は呆然とその姿を見送っていた。

「つかれたー」

私は第四本部まで急いで荷物を届けると、ダッシュで本部まで戻ってきた。

—— 帰りは一応行きと違うルートを通った

「お疲れ様です。では、次は人間界への届け物ですね。19時まで時間が少し迫っているので頑張ってください」

そう言つて荷物を渡す受付の天使さん。

—— 正直言つて休みたかったが、確かに時間が少しまずかつたので急いで行く事にした。

「この荷物は家まで行つた後に、その人の前で開けてください」

「開けちゃって良いんですか？中には何が」

「中には幸運を呼び寄せる空気が入っています。なのでその空気を相手に吸わせてください」

「え、と家族がいる場合には全員に吸わせるんですか？」

「そうでしたね。言い忘れていました。鈴木さんは男性の方で、一人暮らしをしているのですぐに分かると思えます。そして佐藤さんは女性の方で、両親と一緒に暮らしています。対象は娘さんの方です」

「わかりました」

そうして本部から出て私は人間界に向かった。

「えーと、鈴木さんの家は・・・」

一応住所を教えてもらいはしたが、それでも私は辿り着く事は出来ないでいた。

「しょうがない」

そう言っポケットから取り出したのはコンパス

「——妖術」

私がそう唱えると、コンパスに宿る妖精が起きた。

「今から住所を言うからそこまでの道のりを指し示してちょうだい」
そうして私が住所を言い終えた後、コンパスがその場所行かための道を指した。

そうしてコンパスが指す方向へ向かっていると、目的の家まで辿り着いた。

「さーて、いるかなー」

中に入ると——いた。彼が鈴木さんで間違いないだろう。

私は目の前に回りこんだ。——はて、どこかで見たことがあるような、そう思ったがすぐに仕事に戻って鈴木さんの顔（鼻）の近くで荷物を開けた。

詳しく説明されてはいないけど、きっと荷物をあけたら“人間界”に現れるのだろう。

そうして仕事を終えた私は鈴木さん宅を後にした。

「次は佐藤さんのお宅ね」

そうして私はまたコンパスを使い、佐藤さんの家までやってきた。

私はまた家に不法侵入して――

佐藤さんは――いた。

これまた見た事があるような気がしたが、とりあえず目の前で荷物を開けて空気を吸わせた。

「よし、これで仕事終わり」

それにしても、何で本部はこの二人にこの空気を吸わせたんだろう。そんな疑問を抱きながら私は最後の荷物を届けるため、本部へと戻った。

――因みにアオイは気づかなかったが、実はこの二人にアオイは会っていた。と、いうよりもアオイが一方的に相手を認識していただけだが。そう、この二人は第一話で出てきた医者と看護士である。本部はアオイが二人に魔術を使ったことのお詫びとして、この荷物をアオイに運ばせたのである。

――だが、そんな事情をアオイは知らなかった

「こ、これで最後の荷物よ」

そう言っつて荷物を持つて家に持つていく私。

――このまま慎重に歩いて家に帰つても時間ピッタリだろう。

それにしてもこの荷物は一体何なんだろう。いい匂いがするから多分食べ物だと思うけど。

多分中身はケーキみたいなものだろうと匂いで判断した。

私が慎重に歩いているのもそのためだ。

そうして家まで歩くと家の前に誰かがいた。多分あれが依頼主だろう。

私在家まで行くと家の前にいた誰かが分かった。

「あれ、ミドリじゃない。どうしたの？」

「あ、アオイちゃん。実は届け物を待つてて」

「届け物ってこれのこと？」

そう言ってケーキの箱（推定）を掲げるとミドリがあっ、とした表情になった。

「アオイちゃんが持つてきてくれたの？」

「そう、今日の仕事が届け物でね、これ以外にも届け物をしたのよ」
「そう。ところで中身は見てない？」

「見てないわよ。ただ、匂いでケーキだと判断してるけど」

「そう。だったらよかった。アオイちゃん、家が上がってもいい？」
「いいけど、これはどうするの」

「それは大丈夫。だってそれはアオイちゃんのための届け物だもん」
「え、どういう事？」

「アオイちゃんがお仕事頑張ったご褒美にわたしが買ったの」

「え、そうなの？」

「うん、それにそれは噂の稀代の最高パティシエが作ったケーキなんだよ」

「そ、そんなもの貰っちゃっていいの？」

「もちろん、だってそれはアオイちゃんのためのケーキなんだから」

「あ、ありがとう、ミドリ。私、本当に嬉しいよ」

「よかった、じゃあ早速アオイちゃんの家で食べよう」

「ええ！」

———
そうして私の最後の届け物は友達からの最高の届け物だった。

天使の届け物（後書き）

次回予告

アオイ「どうもーアオイです！次回予告のコーナーはつじまっるよー！」

アオ「どうも、アオの燃えカスです」

アオイ「どうしたのよアオ。今回は割りといい出来な気がするのに」
アオ「いやさ、実は風邪引いた状態で書いたせいで風邪が悪化したっばい」

アオイ「何やってるのよ！風邪引いてるのに何書いてるのよ！」

アオ「まだ始まったばかりだからな。読者数を確保するためにも今日投稿するしかなかったんだ」

アオイ「だからって。——まあいいわ因みに製作時間は」

アオ「8時間くらい」

アオイ「馬鹿でしょ。普通初心者は投稿前に何話か作っておくものでしょう」

アオ「衝動で書き始めた作品ですのよ」

アオイ「うわー、それってそのうちこの小説投げ出します宣言？」

アオ「そんな事はしない。やったからにはちゃんとやろうと思ってる」

アオイ「そう、その言葉、信じるわよ」

アオ「おうよ任せてくれって」

アオイ「それじゃ今回の話について話しましょうか」

アオ「そうだね、今回は割りと動かししました」

アオイ「そうよね、私の友人なんて出てきたし。あの娘は最初から出す予定だったの？」

アオ「いや。でも友達キャラは最初から登場させようとは思ってた。それで、いい機会だったか設定を練って今回登場させたんだ」
アオイ「そうなの。本当に衝動で書いたのね。いちいち設定を練ら

なくちゃいけないなんて」

アオ「でも世界観だけは割りと最初から固まってるぞ」

アオイ「それは初耳ね。どんな感じなの？」

アオ「うん。世界観をめちゃくちゃ練って書いた作品は絶対面白くなるって思ってた、凄く中二な世界観が出来た。それでそれをこの作品に当てはめたってわけ」

アオイ「じゃあ、今回ちょっと説明された【妖術】についての設定もちゃんと練られてたの」

アオ「まあ、そうだね。でもちょっと中途半端だったから妖術の設定については少し練り直したかな」

アオイ「へー、それにしても今回はちょっと戦闘とは思えないそれっぽいやつがあったわね」

アオ「うん。それも本当はもっとちゃんと戦わせたかったんだけど、設定上やむなく」

アオイ「あとはサブタイトルね。今回は天使の届け物になってるけどどうしたの？」

アオ「やっぱりサブタイトルは天使の〜でいこうと思ったんだ」

アオイ「まあ、それが無難よね」

アオ「うん。ということで、一話目と二話目のサブタイトル募集しています」

アオイ「だからそれは自分で考えなさいって」

アオ「わかってるよ。それより今回の仕事はどうだった？」

アオイ「うーん、まあ疲れたけど楽しかったかな。それに最後はケーキが食べれたし」

アオ「現金だな。だけどまあ、喜んでもらえたならよかったよ」

アオイ「私はよかったけど読者が楽しめるとは限らないわよ」

アオ「おっとこりゃ手厳しい」

アオイ「さて、じゃあ次回予告をしますか」

アオ「あー、その事なんだが、アオイ」

アオイ「え、またあ？」

アオ 「すみません」

アオイ「ぶつつけで書き始めるからそうなるのよ」

アオ 「いや、でもなんとなくは頭の中で構想が出来てるんだよ」

アオイ「サブタイトルは？」

アオ 「一応、天使の手助け」

アオイ「へへ、どんなの？」

アオ 「今回はアオイ視点じゃないんだ」

アオイ「という事は、一話二話でちよくちよくやってた視点変更を
次回は最初からするってことかしら」

アオ 「そうそう、そんな感じ」

アオイ「・・・そんな事できるの？」

アオ 「頑張りたいと思います」

アオイ「アオ、あなたタイピングが遅いだけでも致命的なのに、さ
らにはそんな難しそうな事に挑戦して。何年かけて作る気よ」

アオ 「前書きでも書いたように火曜日に投稿できたならー、と」

アオイ「無理！絶対無理！せめて水曜日にしときなさいよ」

アオ 「でも一応目標としては火曜日に投稿するつもりだ

アオイ「そんなにハードル上げて、それで大して面白くなかったら
駄目なんだからね。それにあなたは風邪引いてるんだから。」

アオ 「分かってるよ。もしかして心配してくれてる？」

アオイ「そんなわけ無いでしょ！さっさと終わりにしないと次回予
告が長いって苦情が来るわよ！」

アオ 「アオイはツンデレキャラとして活用していこう」

アオイ「ちよつと何言って——」

アオ 「それでは次回」

アオイ「ちよつまっ」

アオ 「ほらタイトルコール」

アオイ「くつ、天使の手助け（仮）」

「「お楽しみに——」」

――舞台裏にて

アオイ「ねえ、私のツンデレキャラ仕様って本当？」

アオ「もしかしたら友達で出すかもしれない」

アオイ「あ、そうなんだ」

アオ「でももし出なかったらアオイ、よろしくな」

アオイ「ええー！ー！ー！？」

――キャラ紹介に『アオイ1〜3話』を追加しました。

――キャラ紹介に『ミドリ』を追加しました。

天使の撮影（前書き）

こんにちは、アオです。

天使の仕事第4話、何とか投稿することが出来ました。

このお話は今までとは違って、アオイ視点ではなく、他者視点で書かれています。

このお話の後の後書きにて少々伝えたいことがあるので、そこまで読んで貰えると嬉しいです。

天使の撮影

体が妙な浮遊感を感じている。

それが何なのか知りたくて、私は目を開けた。そこには――

「はい、天使です」

そんな事を言っている少女が居た。

そして私はその言葉が自分の中にすぐに融けていくのを感じた。

何故ならその少女の背中には――

純白の、穢れなど知らないとさせるほど、白く、美しい翼があったから。

目の前の少女は何かを言っているみたいだが、そんな事、私には関係が無かった。

私は目の前の少女から目が離せないでいた。否、見惚れていたと言った方がいいだろう。

そうして私が少女に見惚れて呆けていると、少女はこちらからの反応が無いことに少し怒った様だった。

「ちょっと、聞いているの？」

「え？」

まだ夢見心地な気分が抜けないのか、私は間の抜けた返事を返すことしか出来なかった。

「だから、あなたは死んだのよ」

「私が、死んでいる？」

そんな事をいきなり言われても、私には実感が無かった。

何故なら、私は目が見えるし、声も出せる、耳も聞こえる、意識だつてはつきりしている。そんな状態でいきなり？死んでいる？と言われても実感が沸かないのは寧ろ当然だと思う。

「そう、あなたは死んでいるの。後ろを見てみなさい、そこにあなたの死体があるから」

そう言われて後ろを振り返ってみると、私の後ろにはかつて自分で

あつたと思われ^れるモノがそこにはあつた。

「これ、は」

「それはあなたの死体。もうそろそろ思い出すと思うけど、あなたは転落死したのよ」

そう言われると、私はさつき自分の身になにが遭ったのかをだんだんと思い出した。

——私の趣味は写真撮影だった

私は今日も休みを利用して今回は山へとやってきた。

山では野鳥のヒナや、自然の景色、木漏れ日の美しい木、山頂での絶景な景色、ありとあらゆる物を撮ろうと意気込んでいた。

山に登って写真を撮っていると、ふいに目の端に何かが写ったような気がした。

なんだろうと思い、目に写った何かがある場所に向かって歩いてみると、私は何かを感じた。

その次には足に妙な感じがして、次には浮遊感、そして思考が追いついた時、私は理解した。

——私は崖から落ちた

そうして意識を失い、今に至る。

「そうか、私は崖から落ちたんだっけな」

「そうよ、その様子だとちゃんと思い出せたようね」

「ああ、しかし、何故こんな事を忘れていたんだ」

「それは簡単。あなたの脳が自然とそれを思い出させないようにしたのよ」

「なるほど」

そうか、私は死んだのか。

その事に対して私は冷静に受け止めることが出来、そして思ったのが

——私が撮った写真、せめてあれを皆に見せてから死にたかった

と、そんな後悔にも似た気持ちを私は持っていた。

「そんな訳で、あなたは死んだ。そして私はあなたを霊界に連れて

行く天使、理解できたかしら」

そんな事を言われても私には返す言葉は一つしか持っていなかった。
「ああ、わかってるよ」

そう、一目見たあの時、あの瞬間に私はこの少女は天使だということを理解していた。

ただ、自分が死んだことを思い出せなかっただけ。

そんな事を思っていると、天使が私に話しかけてきた。

「私の名前はアオイって言うの。あなたの名前は？」

「私の名前は町井光太。教師をやっている」

「そう、それじゃ町井さん、今からあなたを霊界に連れて行くけど何か思い残すことは？」

そう言われて、私はさっき感じた後悔に似た気持ちを口にした。

「私が撮った写真を皆に見せたい」

「それだけですか？」

そう言うと、彼女の頭には疑問符が浮かんだ。まあ死後の望みがこんな事ではその反応は当然だろう。

「ああ、それだけだ」

「ふうん、別にいいですけど。望みはそれだけですか？」

「そうだ」

「それはそんなに大切なことなんですか」

「私にとっては大切だな」

「誰に見せるんですか」

「私の生徒たちに見せてやって欲しい」

私の答えにさらに困惑したような顔をするアオイさん。そして、こんな事を尋ねてきた。

「それは、どんな写真ですか」

「ここで撮った写真だよ。と言っても、これだけじゃ君の疑問は解けないだろうから写真を見せたい理由も言っておこう」

そう言うと彼女の顔は興味津々といった、年相応の可愛い表情になった。

しかしすぐに仕事の顔に戻した。

「別に無理に言わなくてもいいんですよ。町井さんの望みは誰かに迷惑を掛けたりするようなものではないようですから」

「いや、別に無理も何もしていない。これは、私が言いたいから言うだけだよ。それに、生前教師をやっていたせいか、目の前で疑問を抱えている子がいたら、自分が出来る範囲で解消してあげたくなるんだよ」

そういうと、アオイさんは少し赤くなつて照れ隠し気味に言ってきた。

「まあ、言いたいんでしたら私も聞きます」

「ああ、そうしてくれると助かる」

これで私の望みは二つになったようだな、とそんな事を思いながら私は目の前の教え子に語った。

「今の子ども達はね、美しいものを見なくちゃいけないんだ。今の大人達は皆子どもの手本になれるような綺麗さはない。どれだけ子ども達の前で取り繕っていても、子どもは大人の汚い所を見て育っている。それは今に始まった事ではないだろう。でもね、今の子ども達はそれだけじゃなく、他にも問題があるんだよ。今の子どもは皆、家に引きこもつてばかりで外の世界、つまり自然を知らないんだ。自然というのは美しさの宝庫、感受性を育てるにはこれ以上ないものなんだよ。ただ別に、それは自然でなくてもいい、絵でも、音楽でもいい。美しいものを見て心を振るわせる、それが子どもを育てるのに一番必要なことだつて私は思っている。だから私は教え子達に、自らが撮った写真を見せて自然感受性を教えているんだ。しかもそれを見て自分もそれを見たいと思わせることが出来たら、子ども達は外に出る事になる。そうしたら一石二鳥だ、だから私は今日ここで撮った写真を生徒達に見せたいと思っているんだ」

そう語り終えると、アオイさんは尊敬を籠めたような眼差しを私に送ってきた。

「わかりました、町井さん。是非その写真を生徒の皆さんに見せま

しょう」

「ありがとう」

「ところで町井さん、写真を撮ったカメラは何処に」

「あれ、首に掛けていたはずなんだが」

そうして二人でキョロキョロと辺りを探していると、アオイさんは
「あつ」と声を上げた。

「あのー、もしかしてこれですか」

「うん、これだけど」

そこにあつたのはカメラだったものだった。

「私が落ちた衝撃で壊れてしまったのか」

そのカメラは修復不可能なくらい壊れていた。多分あれではフィルムも駄目だろう。

そんな事を考えていると、アオイさんはカメラに近づいて、ぼそぼそと声を発した。

すると、カメラからいきなり人が現れた。

「うう、死ぬかと思ったー」

そこにいたのは女の子だった。年は大体小学校高学年位だろうか、年相応の可愛らしい顔をしていた。

「こんにちは、大丈夫？」

アオイさんが尋ねると、女の子はアオイさんを見た。

「はい、一応は問題ありません。ところで、あなたが私の主人ですか？」

主人、何を言っているのだろう、この子は。しかしアオイさんは構わず続けた。

「あなたを起こしたのは私だけど、主人というのならこっちにいる人がそうよ」

そうしてアオイさんが私のことを言うと、少女は私に挨拶してきた。

「こんにちは、あなたが私の主人ですね」

疑問ではなく断定、そうして私がうろたえているとアオイさんが助け舟を出してくれた。

「町井さんがあなたの主人なのは間違いないけど、町井さんは妖精とかを知らないから私に説明させて」

「あ、そうなんですか。わかりました、お願いします」

そうしてアオイさんは私と向かい合って妖精について説明をしてくれた。

アオイさんが言うには、妖精とはモノに宿った存在らしい。使い込まれたものや、年季の入ったもの、特別な思い入れがあるものには妖精が宿っているらしい。私のカメラにも妖精が宿っていたらしく、その妖精を妖術という不思議な術で起こしたという。

因みに妖術とは妖精を従える術で、妖精が宿っているものなんかを強くしたりすることが可能らしい。

「なるほど、それではあの女の子はカメラに宿っていた妖精なのか」「そういう事です。理解が早くて助かりました」

いきなりこんな事を言われても信じるのは難しいが、今の私は死人で、目の前には天使、大抵の事なら信じる事が出来る。

「それで、あの子を起こしてどうするんだい」

「カメラがあの様子じゃあ、フィルムも駄目でしょう。なので妖精を使って撮った写真を生徒の皆さんに見せようと思ひまして。あの妖精がまだ生きててよかったです」

アオイさんが言うには、妖精が宿っているモノが壊れてしまうと、妖精も死んでしまうらしい。アオイさんはギリギリ妖精が死ぬ前に起こすことに成功したようだ。

「理解してもらえたでしょうか」

見ると、私の目の前にはあの妖精が立っていた。

「ああ、何とかね」

そついうと、妖精はぱつと顔を輝かせた。

「それでは、ご主人様の名前はなんて言うのですか」

「ご、ご主人様？」

一応アオイさんの説明のおかげでどういう意味か理解は出来たが、あくまで理解しただけ。この何とも言えない気持ちとは別物である。

「ご、ご主人様と言うのはやめてもらえないかな」

「では何と呼びすれば」

「町井光太。私の名前は町井光太だ」

「では光太様と呼ばせていただきます」

「や、やめてくれないか」

そうして私が困っているときまたアオイさんが助け舟を出してくれた。

「どうやらあなたの主人は様づけはお気に召さないようよ」

「では、何と呼ばば」

「そうね、お父さんでも呼べばいいんじゃない」

「お、父さん？」

「そうよ。あと、町井さんはあなたに敬語で喋られるのにも抵抗があるみたいだから、本当の親に接するような態度でいれば大丈夫ですよ、町井さん」

アオイさんが私に振り返って確認を取ってくる。

お父さんが、さっきよりは全然いいな。むしろそっちの方が嬉しい感じがする。

「はい、それでいいですよ」

そう言うのと妖精は少し逡巡した後、小声で喋ってきた。

「わかり、ったよ。——お父さん」

そう言われた後、私は何とも言えない幸福な気持ちになった。

生前は一人身であった為子どもがいなかったのだが、なるほど悪くない。

と、そこで

「そういえば、君の名前は？」

うつかりしていた。こちらは名乗ったが向こうがまだ名乗っていないため、何て呼べばいいのか分からない。そうして妖精に名前を聞いてみたが、

「この子にはまだ名前はないわよ」

「そうなんですか？」

「ええ、大体的場合は主人が名付けてるから、町井さんもこの子に

名前を与えてください」

そう言われても困った。私は別に子どもが生まれたらこんな名前にしよう、などと考えた事もなかったのでいきなるそんな事を言われ
ても、

と、私はふと思いついた名前を口にした。

「絵美、絵美なんてどうだ」

私はカメラで美しい自然を撮っていたから絵美。そんな単純な名前。
それを、

「絵美。いい名前だね、お父さん」

笑顔で良いと言ってくれた。

「絵美ですか。いい名前じゃないですか」

「ありがとう。でも、結構単純な名前だけだね」

「それでもいいんですよ。要はその名前に町井さんの心が、愛が籠
もっているかどうかですから」

「そうか、ありがとう」

「それじゃあ絵美、今からお仕事をして貰いましょうか」

「いいけど、何をするの？」

「あなたの記憶に町井さんが撮った写真があるはずだから、まずは
それを思い出せる？」

「あ、大丈夫。ちゃんと思い出せるよ」

「そう、それじゃ行きましょうか」

「行ってくて、どこにですか」

私がそう言つと、アオイさんはさも当たり前のように言った。

「写真なんですから、現像しないと」

私たちは今写真屋の前にいる。

「ここでもいつも現像してもらっていますが、どうするんですか」

私は既に死人だ。普通の人に見えるはずがない。そして、それはア
オイさんにも言える事だろう。アオイさん^{天使}が普通に見えるならばも
つと世界は大騒ぎだろう。

「そこは問題ありません」

そしてアオイさんはめを閉じてまた開いた。

「もうこれで私はこっちの世界にいますので町井さんは私に触れることが出来ません」

試してみたが、確かに触れることが出来なかった。

「天使と言うのは何でもアリなんですね」

「そうでもないですけど、まあ、普通はそう思いますよね」

自分が私の前でやってきた事を思い出しているのか、多少苦笑しながら言っていた。

「それじゃ恵美ちゃん、この中に入ってもらえる」

そう言っ取り出したのはインスタントカメラ。

「うっ、そんな安っぽいものに入らなくちゃいけないの」

「ごめんね。でもこれもお父さんのためよ」

そう言われると、絵美は嫌そうな顔を潜めてやる気に満ちた顔になった。

「お父さんのためなら、こんな事へっちゃらだよ」

するとアオイさんが小声で、

「愛されていますね、町井さん」

「ああ、世の父親は皆こんな気持ちなのかな」

そしてアオイさんは絵美に向き直り、絵美は頷いてカメラの中に消えていった。

「今更ですけど、カメラの種類が違うのに入って大丈夫なんですか」
さきほど受けたアオイさんの説明では、妖精は自分が宿っていたモノにしか入れないとの事だが。

「ああ、それは大丈夫です。インスタントカメラですが、基本的な概念は一緒なので、あとは私の妖術で無理やり——」

最後の方は少し気になったが、大丈夫ならよしとしよう。

「それでは今から現像してもらいます」

「わかった」

そうしてアオイさんは中に入って行き、10分程したところで戻っ

てきた。

「どうでした？」

「だめでした」

そう言うアオイさんの手にはインスタントカメラがあった。

「現像するのに日数が掛かりすぎるんです」

「え？」

「だから、現像するのに時間が掛かりすぎるんですよ」

「それは、当然だと思いますけど」

「え？」

もしかして。そう思い私はアオイさんに思ったことを聞いた。

「まさか、すぐにやって貰えると思ってたんですか」

「うっ」

みるみるうちに赤くなるアオイさん。どうやら本当にそう思っていたようだ。

「時間が掛かつちやまずいんですか」

「駄目ですね」

即答。

——理由を聞いてみたら絵美を長い時間カメラに入れておくのはまずいらしい

なるほど、それなら納得だ。

それにしても、娘までちゃんと心配してくれるなんてなんて優しい天使なんだろう。

その事をアオイさんに伝えたと、

「まあ、私は天使の中じゃかなりのお節介焼きですからね」と、照れながら答えていた。

「それじゃあ、第二案を実行しますか」

「まだ他に案があつたんですか」

「はい、ただこれは結構疲れるので余りやりたくはないんですけど・・・」

「だったら、無理しないでくださいよ」

「いいんです。これが私の仕事ですから」

そう言って絵美をカメラから出すアオイさん。その姿に心の中で手を合わせてお礼を言った。

「じゃあ絵美ちゃん、私の手を握って町井さんが撮った写真をイメージして」

「うん、わかった」

絵美が目をつぶってイメージし始める。そしてアオイさんは握られた手を少し強く握って呟いた。

「——聖術」

アオイさんは握られてない方の手を地面にかざした。

すると、かざされた手の先に紙が浮かび上がった。紙はさらに浮かび上がっていく。

一枚、二枚、三枚、四枚、そのどれにも私が撮った景色などが写っていた。

そして、最後の一枚を出現させると、アオイさんは息を吐いて寝転がった。

「終わりましたよ」

「ええ、見てました。凄いですね、何をやったんですか」

「今のは聖術といって、簡単に説明するとイメージを具現化したんです」

「イメージを？」

「はい、ただこれには強い集中力などが必要なので普段はあまり使わないようにしているんです」

「そこまでもらうなんて、何と云えばいいのやら」

「いいんですよ、これが私の仕事ですから」

「そうですか、でもお礼だけでも言わせてください。ありがとうございます」

すると絵美が、

「すごいねお姉ちゃん。これ、お姉ちゃんがやったんでしょ」

「ええ、そうよ」

「すごいなあ、私にも出来るかな」

「絵美ちゃんにはちよつと無理かもね」

「えー、なんでよー」

そう言つて頬を膨らます絵美、それにアオイさんは苦笑して、

「絵美ちゃんは妖精だから」

と、それだけを伝えた。

「さて、ここが町井さんが勤めていた学校ですか」

「はい、そうです」

私たちは今学校の校門の前のいた。私たちは写真を現像した後、学校までやってきた。

「それにしても、どうやって見せるんですか」

今日は学校が休みだ。そもそもそれを利用して写真撮影に行ったのだから。

「多分、生徒の皆さんは町井さんの死を知らないでしょう」

「ええ、そうでしょうね」

「だから、明日学校でそれを伝えるんです」

「どういうことですか」

「つまりですね・・・」

私はアオイさんの計画を聞いた。その計画の大胆さには多少驚いたものの、私はそれを実行することにした。

——翌日 朝のHR

私は自分の教室の前で立っている。

教室の中はざわついていていた。それは当然だろう。何故ならさっき私の死を他の先生が伝えたのだから。

私は深呼吸をしてドアの前に立った。今から私は教え子達にお別れの挨拶をしてくる。私の体はアオイさんに見えるようにしてもらったので問題ない。後は、気持ちの問題だけだ。

「——っ」

私は意を決して教室の中に入っていった。

「みんな、おはよう！」

私がそう声を掛けるとクラスの中が静まり返った。

そしてぼそぼそと声が聞こえてきた。

「あれって」

「え、先生？」

「先生は死んだってさっき新田が」

「何、もしかしてドッキリ？」

「幽霊じゃねーの」

などと、そんな会話が聞こえてきた。

「皆が驚いているのは分からないでもないが、率直に言おう」

すると、私が真面目な声で喋った為か、また静まり返った。

「私は死んだ。今の私は幽霊だ」

すると、教室で叫び声が上がったが、すぐになくなった。私はその理由を知っているので構わずに続けた。

「いろいろと思う事があるかもしれないがこれだけは覆し難い事実だ」

そうして一人の生徒が私に質問してきた。

「死んだって、幽霊だっていうのは本当ですか」

「ああ」

「でも、先生はそこにいるじゃないですか」

「協力者に力を借りてな、皆に見えるようにしてもらった」

「足があるじゃないですか」

「これはオプションだ。特別に付けて貰ったんだが消した方がいいか」

そう言って私は足を消してもらった。

また叫び声があがったがすぐに静まった。

「信じてもらえたかな」

「あ、はい」

「そうか、それは結構。じゃあ本題に入るが、私は未練があつてこ

うやって皆の前に姿を現した」

「未練ですか」

「そうだ。簡単に言うと、お前達だ」

すると教室内がまたざわついた。

「しずかに。未練と言うのはだな、私が撮った写真をお前達に見せたかった、というものだ」

また教室内がざわめいた。その殆どが苦笑などといったものだ。

「先生、死んでも変わらないんですね」

「ああ、死んで変わるような性格じゃないからな。お前達もいつか死んだとしても変わったりするなよ」

「はは、先生変わんねえ」「死んだらって、先生」「また写真見せられるのかよ」

「そうだ、先生は変わらない。そしてお前達も変わらずに先生が撮って来た写真を見るよな」

私がニヤリと笑うと、

「はいはい、変わらずまたいつもみたいに先生の写真をいやいや見ますよー」

と答えが返ってきた。

「それじゃ、写真はこの封筒に入っている。これを見て、先生が皆に伝えたかったことを考えて欲しい」

「伝えたかった事って、教えてくれないんですか」

「ああ、先生からの最後の宿題だ」

すると、何人かの生徒の顔に涙が見え始めた。

「宿題って、いつ答え合わせをするんですか」

「皆が死んだときかな」

そう言って私は笑った。泣きながら笑った。皆も私と同じように笑っていた。

「それじゃ、先生はもう逝くからな」

「先生!」「待って」「ちょっと先生!」

そんな事を言ってくる生徒達の言葉を無視して私は消えようとした。

すると、

「ちよつと、生徒達の願いを聞かないで何処に逝くつもりですか」
アオイさんが立っていた。

皆はアオイさんの突然の登場に驚いていた。

「そのつもりです」

「ふう、そんなの私が認めるわけじゃないですか」

「どついう事ですか」

「こついう事です」

そう言つて懷から取り出したのはインスタントカメラだった。

「なるほどね」

「はい、そついう事です」

アオイさんの言つた意味が分かつた私はさつそく皆に呼びかけた。

「はい、ここに集まれ。今から撮影するぞ」

その言葉を理解した生徒達が一斉に私の許へやってきた。

「はい、ちゃんと並んでー。これじゃ皆写らないよー」

アオイさんの言葉によつてちゃんと並ぶ生徒達。

そして、

「よし、じゃあいくよ。はい、チーズ」

パシャリ

——その日、町井先生のクラスでは最高の写真が撮られ、生徒達はその写真が現像されるのを今か今かと待っている。

天使の撮影（後書き）

—— 次回予告 + α

アオイ「アオイと——」

アオ「アオの——」

「「次回予告コーナー！」」

アオ「何？この出だし」

アオイ「いつも同じような始まり方じゃつまんないかなーって」

アオ「それ以前にここのコーナーは好評なのか」

アオイ「好評に決まってんでしょ」

アオ「なんでさ」

アオイ「だって、私は無休無給でここの仕事やってんのよ、それが好評じゃないはずがないわ」

アオ「アオイ——」（泣）」

アオ「アオイ、大丈夫だ。見てくれている人はちゃんといるから」
アオイ「どういう事？」

アオ「第二話投稿か、第三話投稿あたりでこの小説をお気に入り登録してくれた人が一人いるから」

アオイ「えっ、それ本当！？」

アオ「ああ、たった独りだけとお気に入り登録されていた」

アオイ「アオストーリーップ！字、字が違う！」

アオ「ああ、すいませんでした！」

アオイ「もう、今のお気に入りから削除されたらどうするのよ」

アオ「面目ない」

アオイ「お気に入り登録してくださった人、どうもありがとうございます。そしてこの文章を読んでいる皆様もこんな駄文を読んでもださってありがとうございます」

アオ「ありがとうございます」

アオ「それじゃ、次はこのコーナーの意義を全うしようか」

アオイ「分かったわ。ってあれ？何かいつもとタイトルが違うような」

アオ「気づいた？いつも次回予告以外もやってるから付け足しておいたのだ」

アオイ「なんだかなあ」

アオ「とりあえず+αをやっちゃおうか」

アオイ「今回の話について話せばいいのかしら」

アオ「まあそんな感じ」

アオイ「今回はアオは結構無謀なことに挑戦したわね」

アオ「うん。本気で疲れた」

アオイ「そんなに疲れたの？」

アオ「うん。慣れない事を行った上、シナリオを再構成し直したからね」

アオイ「何やってんのよ」

アオ「こんなのじゃない！って言うてる作家みたいな感じ？」

アオイ「全国の作家さんに謝りなさい」

アオ「すいません、調子乗りました」

アオイ「ところで、今回は割りと設定が明らかになったわね」

アオ「妖精と妖術の設定の事だね」

アオイ「そうそうそれぞれ」

アオ「いやーもうそろそろ明かした方が良くかなと思ってさ。ほら、前回も出したし」

アオイ「こういう設定なんかもおまけで出すの？」

アオ「もちろん。そうじゃないとネタが間に合わないし」

アオイ「さらっとカミングアウトしたわね。別に良いけど」

アオ「キャラ紹介も随時更新しようと思ってます」

アオイ「ま、せいぜい本編においていかれないようにね」

アオ「もちろん」

アオイ「ところでアオ、今更なこと言っている」

アオ「え、何？」

アオイ「実は横に書いてある名前見づらいのよね」

アオ「あつ」

アオイ「基本的にここって私とアオでやるでしょ。そうするとアオとアオイがとてつもなく見づらいのよね」

アオ「うう、ミスった」

アオイ「そもそもどうしてこんな事したの？」

アオ「そっちの方がいいかなって思ったんだけど逆だったみたいだね」

アオイ「そうね」

アオ「よし、じゃあ他のキャラをちよくちよくここに呼ぼうか」

アオイ「それはいいわね」

アオ「と言ってもアオイには大体出て貰うけど」

アオイ「私の、休みが」

アオ「どんまい」

アオイ「あんたに慰められたってちつとも嬉しくなんてないのよー！」

アオ「おう怖い怖い」

アオイ「ガルルルル」

アオ「アオイ、そんな事やってるとギャグ要員に成り下がるぞ」

アオイ「そ、それはちよつと勘弁」

アオ「じゃあ次回予告しようか」

アオイ「ええ、次回はどんな話？」

アオ「ああごめん。次回の話はまだ決めてないんだ」

アオイ「またあ？！」

アオ「いや、これにはちよつとした理由があるんだ」

アオイ「何？」

アオ「もうすぐ試練があるんだ。だから投稿はちよつと出来そうにない」

アオイ「試練って？」

アオ「ヒントをやるう。自分の職業は学生」

アオイ「もしかして」

アオ「はい、テストですー（泣）」

アオイ「なるほどね、テスト勉強のために投稿が遅くなると」

アオ「そういう事。たぶん次回の投稿は28か29日になると思う」

アオイ「ただでさえ書き始めて掲載話数が少ないっていうのにテストで投稿が遅くなるって、どうするのよ」

アオ「一応、キャラ紹介コーナーは更新しようと思ってる」

アオイ「まあ、それが今出来る最善か」

アオ「そういう事。という事で、すいません読者の皆さん、3週間ばかり本編の投稿はお休みます」

アオイ「3週間って、結構長いわね」

アオ「今回は気合入れてるからな、上位を目指すぜ」

アオイ「因みに去年の順位は？」

アオ「中の上くらい」

アオイ「・・・コメントしづらいわね」

アオ「自分、褒められれば伸びるタイプだから」

アオイ「あ、そう」

アオ「・・・」

アオイ「・・・」

アオ「・・・」

アオイ「・・・別に褒めないわよ」

アオ「知ってたさ・・・」

アオイ「ほら落ち込まない、せめてタイトルコールだけでもするわよ」

アオ「分かったよ」

アオイ「それでは次回」

アオ「天使の仕事第5話」

「「お楽しみに!!!」」

——舞台裏にて

アオイ「つて、第五話つて何よ?!」

アオ「いや、実はまだ決まってるんでなく」

アオイ「だったら最初に言いなさいよ」

アオ「ごめん」

アオイ「はあ、もういいわ。言っちゃったものはしょうがないし」

アオ「そうだね、とりあえず早く終わらせないと」

アオイ「どうしたのよ、アオ」

アオ「アオイ、気づいてないのか。この後書き、だんだん長くなってるんだぞ」

アオイ「え、本当?」

アオ「うん。一話目の後書きから見るとかなり長くなってる」

アオイ「そういう事は早く言いなさいよ」

アオ「それ、二回目（ボソッ）」

アオイ「うるさい!」

——世界観設定に【妖術】を追加しました

——世界観設定に【妖精】を追加しました

天使の霊界案内 1 - 1 (前書き)

こんにちは、アオです。

投稿が遅れてしまい、申し訳ございませんでした。

言い訳はしません。完璧に自分の落ち度です。本当にすみませんでした。

遅れてしまった事へのお詫びとして相応の内容の文を書こうと思っていたらかなり長い文章になってしまいました。なので二話に区切って投稿します。けど、内容は薄っぺらいような気がします。

さて、話は変わりますが、この話ではサブタイトルはもの凄く空気です(予定)。

内容については本編を読んで確認してください。

次の投稿は未定ですが、できる限り早くしたいです。

天使の霊界案内 1 - 1

コンコン

——ガチャ

「アオイちゃん、いるー？」

カリカリカリ

「ん、あ、ミドリ・・・」

「大丈夫？結構疲れてるみたいだし休んだら」

カリカリ、カリカリ

「ありがと、あともうちよつとしたら休もうかしらね」

「じゃあ私はお茶の準備をしてるね」

「ありがとう」

カリカリカリ、カリリ、カリカリ

——アオイの目の前にはこれでもかという位の書類の山がある。これは比喻ではなく実際に山になっている。その高さ、実に約1m30。それほどまでに積み上げられた書類が4つ並んでいたら山と呼んでも間違いではないだろう。

そしてその山を相手にしているのは一人の少女。名はアオイ。この少女は人を簡単に過労死させられるであろう書類の山を一人で片付けている。そう、一人で。（大事なことなので2回言いました）

「っ、疲れたよう」

今少女が終わらせようとしている書類も、厚さ10cm程ある。これまで少女が片付けてきた量を考えれば大した事はない量（それでも多いです）だが、裏を返せば今までずっと、これ以上のものを相手にしてきたのだ。体力がある人でも精神力が持たないし、逆もまた然り。——故に、このいかに少女が事務仕事が得意だとしても、3日間ずっと戦い続けた少女の体力と精神はもう限界であることは必然である。

「負けない、負けてたまるもんか」

そう言いながら健気に労働基準法とかを全力全開で無視している
(霊界にそういうものは無いが)書類整理を続けるアオイ。

——— 彼女がこんな事をしているのには理由がある。

——— 前回の仕事でアオイは人間界に多大な影響を与えてしまった。術の行使、それだけだったら大体の天使はする上、認められているので問題は無い。しかし、アオイのは行き過ぎていた。

前回アオイは騒ぎ出した生徒を【魔術】で静かにさせた。しかし、それだけならここまでのペナルティは無い。問題は次にある。事もあるうにアオイは聖術を沢山の一般人に見せてしまったのだ。しかもそれを写真に収めるなどという暴挙までした。これだけの事をすればここまでのペナルティは当然と言えよう。

早い話、因果応報というやつである。

そして今回アオイに出されたペナルティが十人位で片付ける量の仕事を早々に片付けるとのことだった。天使は基本的に忙しい仕事だが、アオイのは常軌を逸していた。しかもこれを終わらせた後は、今回のペナルティで働けなかった分の仕事を片付けなくてはならない。そんなアオイを手伝うため、ミドリは自分の仕事を出来る限り早く終わらせてアオイの手伝いをしていた。 ええ娘やなあ。

「お、終わった」

どうやら一息ついたらしい。アオイはだらしなく机に突っ伏している。

「はい、アオイちゃん」

「あ、ありがとう、ミドリ」

アオイは渡された飲み物を煽るように飲んだ。 というか実際煽っていた。

「ふう、ちょっと生き返ったわ」

「ふふ、おかわりまだあるから遠慮しないでね」

「ありがとう。じゃあもう一杯頂こうかしら」

「はいどうぞ」

「いただきます」

私は書類を整理していた。前回の仕事でそれはもう見事にやらかしてしまっただから仕方ないと言える。自分の所為だと分かっていてもこの量には泣けてくる。しかし、私には強い助っ人がいて、その助っ人も私のために頑張っているのだから私も頑張らなくてはならない。そして私は今、その助っ人が淹れてくれたお茶を飲んでいる。

「ふう、おいしいわね」

「ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいな」

「ミドリがいてくれて本当に助かったわ」

ミドリの存在はとてつもなく大きい。書類整理は私の仕事なので余り手伝ってもらわないが（ミドリがどうしても言うので少しだけ手伝ってもらっている）、他の事ではミドリは大変貴重な人材だ。そう、ミドリには料理を作ってもらっている。ミドリは料理が得意なので、こうやって私が家に引きこもって仕事をしているとよく作りに来てくれる。さらに散らかった部屋の整理など、基本的な家事を代わりにやってくれるので、私はミドリに大変感謝している。

「いつも悪いわね、ミドリ」

「いいんだよ、好きでやってることだから」

「それでも言わせて。いつもありがとう、ミドリ」

「もう、別にいいって言ってるのに」

ミドリは少し照れたような顔をした。

「さて、もう少し休んだら仕事を再開しますか」

「それじゃ、それまでゆっくりくつろいでて」

「そうするー」

そう言っ私はお茶を飲み干すと、座っていたイスに倒れ掛かった。

「そういえばさーミドリ、あなたは今日いつ頃帰るの？」

「あ、その事んだけど、アオイちゃんに聞きたいことがあるんだけど」

「いいわよ、何」

「今日はお泊りしていいかな？」

お泊り、というのは私の家だろう。ミドリはこれまでも何度か家に泊まったことがあるから別に構わないけど、いきなりどうしたんだろうか。

「まあ、別にいいわよ」

「そう、よかったあ。これでアオイちゃんのお手伝いがしやすくなるよ」

「ああ、そういう事」

本当はお断りしたかったけどミドリはこれで一度決めた事は貫く多少頑固な性格だから言っても仕方のない事は既に分かっている。ミドリにだって自分の仕事があるのに、それを早く終わらせて私を手伝ってくれている。そうやって私のためにと手伝ってくれる相手を、そう無碍には扱えない。それに、私が頑張ればミドリの負担が減る。だったらそれを実行すればいいだけの事。そういう結論に達すると、俄然やる気が湧いてきた。

「——じゃあ、お願いしようかしら」

「うん、まっかせてえ」

——そうして私たちは仕事に戻った。

—— 1日目

「一山制覇——！」

アオイ、山を一つ消化。

残り、80%

—— 2日目

「アオイちゃん、頑張つて」

「うつつ、なんとか終わつた」

アオイ、二つ目も消化。

残り、60%

3日目

「うう、まだ中間地点なの？」
アオイ、多少の疲れにより速さ減。
残り、45%

4日目

「アオイちゃん、ファイトファイト！」
「うう、なんとか終わったあ」
残り、20%

5日目

「これで、終わりよ！！」
「やったあ、アオイちゃん凄い！」
「こ、これで休め」
「さあ、アオイちゃん、あとは溜まった仕事だけだよ。頑張ろうね」
「ぐすつ、そうだったわね」
アオイ、ペナルティ分を全て消化。
しかし、まだ5日分の仕事が溜まっている。

6日目

「これで、どうだああ！！？」
「すごいすごい！3日分を一日で終わらせるなんて」
「ふ、この程度か。他愛も無い」
「お疲れ様アオイちゃん。次の（今日を入れた）3日分の仕事は簡単なやつを受けてきたから」
「ミドリい、あなたってば最高よ！！私、こんなにいいお嫁さんを貰えて幸せだわ！」
アオイ、気合により3日分の仕事を消化。
しかし、その反動によりテンションが若干変化。

7日目

「あともう少しね・・・」

「うん、本当によく頑張ったねアオイちゃん」

「ここまでこれたのもミドリのおかげあってこそよ、ありがとう」

「そ、そんなお礼なんていいよ」

「そうだったわね、お礼は最後の京都明日を含めた2日分の仕事を終わらせてからよね」

「そうだね」

「よし、頑張るぞー!」

「おー!」

アオイ、3日分の仕事を消化。

残りは2日分、ゴールが見えてきた。

8日目

「ついに、ついに終わらせたわ」

「おめでとう、アオイちゃん」

「じゃあ今度こそお礼を言わせて貰うわね。ありがとうミドリ、ここまで来れたのはあなたのお陰よ、助かったわ」

「ふふ、どういたしまして」

「何か困った事があったら私に言ってね。すぐ助けるから」

「じゃあその時はお願いするね」

「ええ、どんな事でも大丈夫よ」

「うん。っとそうだ、アオイちゃんにちょっといい知らせがあるよ」

「何かしら」

「明日の仕事は霊界の見回りについて、本部からの伝言があったよ」

「え、それ本当!?!」

「うん、アオイちゃん頑張ったから本部の人達からのご褒美だって」
「そんな、あれは自分のペナルティを片付けただけなのに」

「私も明日のお仕事はアオイちゃんと一緒だから明日も一緒にお仕事しようね」

「そうなの？」

「うん」

「分かったわ。明日もよろしくね、ミドリ」

「よろしくだよアオイちゃん」

こうしてアオイのペナルティは終了。

やっと本編に入ります。

—— 次の日

「さあ、今日も元気に仕事をしましょうか」

「うんそうだね」

今日の私たちの仕事は霊界の見回りだ。この仕事は霊界で起こった揉め事の鎮圧だとかいろいろやるので別に楽な仕事ではないが、普通はそんなに大した揉め事は起きないので結構楽な仕事とされている。

「よし、じゃあ行きましょうか」

「うん、いこういこう」

「とりあえずまずは本部にいく？」

「そうだね。それがいいと思うよ」

最初に本部に行く理由は二つある。

まず第一に、この仕事は本部からの仕事なので本部に行って簡単に手続きを行わなければならない。

第二に、私たちが見回るのは第三区なので各区の中心にある本部から見回ったほうがいろいろと楽なのだ。

というわけで私たちはまず本部に向かった。

「はい、それでは本日のお仕事頑張ってください」

私たちは本部の受付で今日の仕事についての説明を受けた。といっても別段変わった事は無く、形式としてやったという感じだ。

「あと、見回りで何かありましたら仕事の最後にお申し付けください」

「わかりました」

それにしても、この受付の人は何か見たことがあるようなあれ、なんだっけ。

そうだ、私が届け物をした時にいた受付の天使さんだ。

「どうかされましたか？」

おつといけない、どうやら見すぎていたみたいだ。天使さんが何ですかという目でこちらを見ている。

「いえ、なんでもありません」

「そうですか」

「はい、では行ってきます」

「行ってきました」

そうして私たちは本部を出た。

さて、じゃあ頑張りますか。

「とりあえずグルッと回りましょうか」

「そうだね」

私たちは飛んで見回りを始めた。

しばらくそうして見回りをしていて、

「あれっ」

「どうしたのアイちゃん」

「うん、ちよつと降りるわね」

私の視線の先にはちよつとした顔見知りがいた。

「おはよう桜井君」

「え？」

彼は突然後ろから掛けられた声にビクツと反応して振り返った。

「私よ、覚えてる？」

「あ、アイ？」

「そつよ、久しぶりね」

「な、なんでお前がここにいるんだ？」

「なんでもなにも、私は霊界^{こゝろ}に住んでるし、ここで働いてるわよ」
「そうだったのか」

「何、もしかしてここで天使を見たことなかった？」

「いや、何度か見てるけどお前を見かけた事はなかったからてっきりいないのかと」

「そうだったの」

「ねえねえアオイちゃん、この人知り合い？」

「いけない、ミドリのことを忘れてたわね」

「紹介するわ、彼は桜井直人って言ってこの前私が連れて来た人よ」
「もしかして、例のあの人？」

「ちよつと、ハ。ー・ポッターみたいな言い方しないでよ」

「え、何それ？」

「ごめんなさい、とりあえずそれで合ってるわよ」

「そうなんだー、この人がアオイちゃん伝説の関係者だったんだ」
「なによそれ」

私の伝説ってなにかしら。そんなもの、聞いたことがない。

「アオイちゃん、仕事をしてはペナルティを貰ってくるからねー」
それが一部で伝説になってるんだよ」

「ああ、そうですか」

「なあ、アオイ。とりあえずこの人誰だ？」

また話が脱線してしまった。桜井君にミドリを紹介しないと。

「ごめんなさい。こっちの娘はミドリと言って私の友人よ」

「よろしくねー」

「あ、ああよろしく」

ミドリは桜井君の手を握ってぶんぶん振っている。桜井君はそれに少し戸惑っているようだった。

「ほらミドリ、桜井君が困っているみたいだからそれ位にしときなさい」

「あ、ごめんねー」

「いや、大丈夫だ」

「ところで桜井君、こんな所でどうしたの？」

「ああ、ちよつと気分転換に散歩に出ていたんだ」

「あら、そうなの」

気分転換に散歩、そういえば最近はそんな事やってる暇がなかったな。まあ、言っちゃアレだけどこの仕事だって散歩みたいなものなだけでね。

「アオイたちは何をやってるんだ？」

「私たち？私たちは巡回の仕事だよ」

「巡回と言う名のお散歩だけどねー」

「ミドリ、そういう事言わない」

とりあえず私はミドリの頭にチョップをいれておいた。

「うう、酷いなーアオイちゃん」

「そんな事言つてると天使の仕事を誤解されるでしょう」

「そうだったね」

「桜井君、一応言っておくけど天使の仕事ってそんなに楽じゃないわよ」

「あ、ああ、大丈夫だ。誤解なんてしてないよ」

「そう、ならいいけど」

ふう、誤解されなくてよかった。これで誤解されると天使の威厳つてものがなくなる気がするしね。

「あ、そうだ」

と、桜井君が唐突に何かを閃いたような声を出した。

「どうしたの？」

「なあ、アオイ。その巡回に俺も付いて行っっていいか？」

「いいけど、なんで？」

「ここの案内をして欲しいんだ」

「そういう事だったら任せなさい」

「よっしゃ、ありがとう」

「あれー、さっくんも一緒に来るの？」

「そうだけど、さっくんって？」

「桜井君だから、さっくん。だめかな？」

「いや、別にいいけど」

「ならさっくんで決定だね」

「あ、ああ」

さっくんか、ミドリ、もうちよつとセンスを磨きなさい。

「まあ、とりあえず行きましようか」

「分かった」「分かったよー」

そうして私たちは巡回のついでに桜井君を案内することになった。

「なあ、アオイ」

「どうしたの？」

「霊界って、あっちとあんまり変わんないよな」

あっちと言うのは人間界の事だろう。

「ああ、それね。霊界ってのは人間の魂の保管所みたいな所だからよ」

「どういう事だ？」

「つまりね、ここでは死んだ人の魂が願いを叶える場所なのよ」

「ん？願いを叶える場所が保管所なのか？」

「人は死んだ後には必ず霊界に連れて来られるものなのよ。そして連れて来られた魂は選択する事が出来る。つまり、？転生？か？消滅？ね。今の二つは極論だけど、ここにいる人の魂は殆どが転生希望者なの。だから、人の願いが叶う保管所なのよ」

「うーん、分かったような分からないような」

「私もそこまで説明がうまくないから気になった事は何でも聞いて頂戴。そっちの方が効率的だし」

「だったら、さっき言った？消滅？ってなんだ？」

「？消滅？って言うのはそのままの意味で、その人の魂を消し去る事よ。もう転生も何も出来ないような状態になるって事ね」

「そんな事を望むやつっているのか」

「これが結構いるのよ。人生に疲れた人だとか、生前、何かとても

酷い事に遭った人なんかは特にね。他にも？消滅？する魂はあるけど、これは多分後で説明する事になるわね」

「なるほど」

「他には、何かある？」

「あ、じゃあさ。何で転生する前に長い間保管したりするんだ？」

「転生って言っても簡単には出来ないのよ。転生するに当たって、ちよつとしたステップを踏まなければならないのよ。それが、等価交換。転生するにはここで働いて、溜まったポイントの範囲で来世を選択できるのよ」

「ここで働けば来世ではいい思いを出来るってわけか」

「ま、そんな感じね。性別だって選べるし、人に転生するか、動物に転生するかだって選べるわよ」

「それは凄いな」

「凄いけど、その分沢山働かなくっちゃいけないのよ」

「もう一度人として生きるのにはどれくらい必要なんだ？」

「まあ、最低でも1年。でもこれはかなり稀なケースで、普通は4〜6年位は働かないと駄目ね」

「俺って、稀なケースだったのか」

「そうね、かなり稀なケースよ」

「そうだよー。最短の1年で、さらに天使が贖罪してるんだからねー」

「え、それって・・・」

「そんな事はどうでもいいわよ。それで、人間として転生するのは4〜6年は働かなくっちゃならないんだけど、これが結構難しかったりするのよ」

「え、なんで」

「そもそも霊体っていうのは、そこまで長持ちはしないのよ。人の魂がカタチを成したのを霊体って言うんだけど、霊体っていうのはそこまで長く体を維持できないのよ」

「どうしてだ？」

「霊体の維持は、前世でどれだけいい事をしたかによって維持できる時間が決まるのよ。霊界では前世の行いで出来たポイントで体を維持して、働いて転生するためのポイントを稼ぐのよ。でも一応ここで働いた分のポイントで体の維持を伸ばす事も出来るんだけど、やっぱり前世での行いが大きいわね」

「体が維持できなくなったらどうなるんだ？」

「？消滅？する。これがさっき言った魂が？消滅？する他の場合よ」

「そう、か」

「ふう、ちよつと疲れたから休憩でもしましょうか」

「賛成」 「ああ・・・」

「じゃあ、とりあえずあの公園に行きましょう」

そうして私たちは公園に向かった。

「ん、あれは」

「どうしたの？」

「今日はよく知り合いに出会っわね」

「え？」

「ちよつと待ってて」

そういつて私は今見つけた二人の親子の許に向かった。

「こんにちは」

「ん？」

私が声を掛けると相手が振り向いた。その顔はたちまち変化し、やがて笑顔となった。

「おお、アオイさんではありませんか！」

「おねーちゃん、久しぶりー」

「お久しぶりです、町井さん、絵美ちゃん」

私が声を掛けたのは、前回の仕事で私がメチャクチャした時のある種の原因である町井さんと恵美ちゃんだった。いやまあ、原因って言うか全部私が悪いんだけどさ。

「アオイさん、あの時は本当にありがとうございました」

「おねーちゃん、どうもありがとー」

「いえ、あれが私の仕事ですから」

そうして話していると後ろから二人が近づいてきた。

「アオイちゃん、この人達って」

「前回の仕事で私が担当した町井さんとその娘さんの絵美ちゃんよ（天使は、魂を霊界に連れてくる事を担当すると言う）」

「どうもはじめまして、アオイちゃんの友達のみどりです」

「どうも、私は町井光太、こちらが娘の絵美です」

「え、スナイパー!？」

「お、桜井じゃないか、何でこんな所にいるんだ？」

「いや、スナイパーこそ何でここに、っていうか子どもが居たんですか？」

「ああ、ちょっとややこしくなっちゃったわね」

（説明中）

「なるほど、彼女の病院に行く途中で事故死か」

「先生も、撮影中に転落死ですか」

二人はどうやら知り合いだったらしく、桜井君が二年生の時に町井さんが担任をしていたそうだ。因みにスナイパーというのは町井さんのあだ名らしい。

「桜井は彼女と生きるために頑張っているのか」

「はい、待っている麻衣のためにも俺は絶対に転生しなくちゃならないんです」

「そうか、何か困った事があつたら遠慮無く言ってくれ、力になるう」

「ありがとうございます」

「ねーねーお父さん、このお兄ちゃんお父さんの生徒だったんだよね」

「ああ、そうだよ」

「お兄ちゃん、私はお父さんの娘で町井絵美つていいいます。よろしくお願いします」

「ああ、よろしくな絵美ちゃん」

と、桜井君が町井さんに近寄って、

「先生つて、結婚してたんですか？」

「いや、してないが」

「え、じゃああの娘はどうしたんですか？まさか、養子？」

「そのようなものだな。詳しい事はまたいつか話そう」

「分かりました」

と、桜井君が町井さんから離れた。

「そつえば先生、今日はどうしたんですか？」

「絵美と遊んでたんだよ。お前は？」

「アオイ達にここw案内してもらっていた所です」

「ほう、アオイさん」

「なんですか？」

「私達も案内してもらってもいいですか？」

「はい、いいですよ」

「よかった、ありがとうございます」

「とりあえず、お昼にしませんか？」

「分かりました」

と、私はクルリと皆に向き直って、

「という事で皆、お昼にしましょう」

「お昼つて、食堂に行くの？」

「まあね、ここから近いし」

「よし。それじゃレッツゴー！」

「ここが、食堂」

「そうですよ、町井さんは始めてきましたか？」

「ええ、ここには天使が沢山いるからてつきり天使専用かと」

「まあ、確かに天使ばかりですけど別に専用ってわけじゃないで

すよ」

「でも、前俺がここで飯を食べた時に結構視線を感じたんだが」

「あんまりにも天使しかいないから天使専用って勘違いしてる天使もいるかもね」

「でも大丈夫ですよー、ここでさつくん達にご飯を食べても何も悪い事はありません」

「そうよ。ま、とりあえず席に着きましょうか」

そして私達は席に着いた。周りには背中に羽が付いている人達ばかりなので私達は結構目立った。

「メニューはこれよ」

「お、結構安いですね」

私が渡したメニューを見せて軽く町井さんが驚いていた。

「それに美味しいから私達はよくここで食べるんですよー」

「ああ、確かに美味かったな」

桜井君って結構神経図太いのかしら。

ここには一度来た事があるのも手伝ってか、かなり慣れている。

「皆、もう決まったかしら」

私がそう聞くと、返事は首を縦に振る事で返ってきた。

私は店員を呼ぶと、すぐに来てオーダーを取り始めた。

皆の注文が終わり、私の番が回ってきた。

「私は、いつもので」

そういうと店員は何事も無かったかのようにオーダーを伝えにいった。

「すげーな。いつもので伝わるのかよ」

「ふふん、まあね」

「あー、確かにアオイちゃんのいつものは覚えやすいからねー」

「どういう事ですか？」

「大丈夫、すぐに分かりますよー」

「は、はあ」

そして料理を待ってる間に談笑していると、町井さんから質問があっ

た。

「そういえば、アオイさん、聞きたい事があるんですけどいいですか？」

「はい、答えられる事なら」

「私を知る限り、天使とは性別はなっただと思うんですが」

「ああ、それですか」

私はコホンと咳払いをして説明を始めた。

「確かに天使には性別が無いのも存在します。しかし、天使にも種類がありまして、性別が無い天使もいれば、私やミドリのように性別がある天使もいるんです。性別が無い天使を純天使、ある天使を半天使なんて言ったりしてます」

「なるほど。ところで半天使と純天使は性別の有無以外で違うところがあったりしますか？」

「簡単に説明しますと、半天使が人間から天使になった天使で、純天使がそれ以外の天使です」

「と、言う事はアオイさんもミドリさんも元は人間だったんですか」
「そう言う事です」

——ここまで言うのと、次は生前について聞かれたりしているりと面倒だろうから早くこの話題から抜けないと。

「それで、半天使と純天使では大抵純天使の方が身分が上ですし、能力もあつちが上です」

ここまで説明すると、桜井君も質問に入ってきた

「なあアオイ、能力って聖術とかの事か？」

——よし、食いついてきた。

「そうよ」

「そういえばアオイさんは妖術とかも使えましたね。他には何か使えるんですか」

町井さんはこのさっきの話題は避けた方がいいと判断したのか、追及したりせずに乗ってきた。

「私ができるのは、妖術、霊術、聖術、魔術とかかしらね」

「ま、魔術う！？」

私が魔術を使えると言った途端、桜井君が変な声を上げた。

「何、どうしたの桜井君」

「いや、お前天使だろ。天使が魔術って・・・」

「それについては私も同意見ですね」

「どうやら二人には天使が魔術を使う」おかしい、という方程式が成り立っているらしい。まあ、分からなくもないけど。

「大体の天使はこれを使う事が出来るわ。まあ、それは半天使だけで純天使は使えないけど」

「何か、最近俺の天使像がかなり崩れてきてるんだけど」

「現実なんてそんなものよ」

「なんだかなあ・・・」

はあ、と溜息をつく桜井君。天使に対して過度な期待でもしてたのかしら。

「アオイさん、今の能力について説明してくれませんか？」

「はい、分かりました。まず妖術とは、物体の概念を強化、つまり存在理由を明確にして強化するとも思ってください。次に霊術は、霊力を使っているんな事が出来ますね。次に聖術、これは霊術の上位術でイメージを具現化させることが出来ます。最後に魔術、これは思考に作用すると考えていいです。要は相手の脳みそを好き勝手出来ると思ってくれと分かりやすいと思います」

「すげーな、それを青いだけじゃなくて殆どの天使が出来るのか」

「まあ、そうだけど、天使だけじゃなくても例えば桜井君にだって出来るわよ」

「な、本当か！？」

「とても期待している所を悪いんだけど、これを習得するには結構な時間が必要よ」

「そ、そうか」

私がそう言つと、桜井君は目に見えてがっかりとした。

「まあ、でも妖術くらいなら割と簡単に覚えられるかもね」

「そ、そうなのか？」

「ええ、妖術は結構簡単な部類だから妖術を使える霊体は結構いるわよ」

「・・・私もこの前そんな人達をやっつけたし。」

「ま、教えてもらっんならミドリに教えてもらいなさい」

「え、私？」

「そうよ。あなた、私より妖術得意じゃない」

「へえ、そうなのか」

「妖術だけだよ。他なんて全然だもん」

「そ、それでも妖術は得意なんだよな？」

「うん、まあ」

「じゃあさ、迷惑でなかったら教えてくれないか？」

「えーと、私でいいなら・・・」

「よっし！」

そう言っただけでポーズをとる桜井君。男の子ってやっぱりこういうのに憧れたりするものなのかしら。

と、だったら

「ミドリ、町井さんにも教えてあげて。出来たら桜井君より優先順位高めです」

「え、何でだよ」

すると、桜井君が少し不満そうな顔をした。

私は絵美ちゃんをちらりと見て、

「悪いわね。ちよつと事情があつて町井さんは早めに妖術を覚えた方がいいのよ」

すると、町井さんにも私の真意が伝わったのか、ミドリに教えてもらっような顔だ。

——そうこうするうちに頼んでいた料理が運ばれてきた。

「お待たせいたしました」

すると、ウェイターさんが持ってきた料理に皆の視線が集まった。

「こちらが・・・で、こちらは・・・、そしてこれが・・・、

最後にこれがアオイ様ご注文のいつものものです」

「ありがとうございます」

「どうぞ、ごゆっくり」

私に運ばれてきた料理を見てミドリ以外が皆啞然としている。どうかしたのかしら。

「どうしたの、食べないの？」

「いや、それもしかして一人で食べるつもりか？」

「もちろんよ」

何を当たり前な事を言っているのだろう。

しかし、皆は違うらしく私を怪訝な目で見ている。

「なあ、さっきいつものって言ったけど、いつも食べてるのか？」

「うーん、まあ割りとね」

私が頼んだのはハンバーグ、カレー、牛丼、スパゲティ、そして飲み物を2Lほどだ。

「変かしら？」

私が言うと、みんな困ったような表情を浮かべた。

「変って言うか、量多くない」

「え、普通でしょ。これくらい」

すると、みんなはさらに困ったような表情をした。

「ま、まあ、アオイちゃんはこのが普通だから皆気にせず食べよう」と、ミドリが引き攣った顔で喋った。

すると、皆もその言葉に反応して自分の料理を食べ始めた。

「あ、確かにおいしいですね」

「だろ」

「お父さん、私のこれとそれ交換しよう」

「やっぱりここの料理おいしいー」

そして、みんな思い思いに食べたように、最後には満足そうな顔をしていた。

——アオイに料理が運ばれた時、周りでは

「うわ、またあの娘あんなに食べてるよ」
「あの娘ってアレだろ、この前メチャクチャパネルティ喰らってた」
「ああ、そういえば最近見てなかったな」
「あれ、だとしたらあの量おかしくね？」
「だな、この前はさらに食べてたもんな」
「ああそれ、あの娘の友達が毎日食べさせてたかららしいぜ」
「なるほど、前回の俺達の意見を参考にしたわけだな」
「別にこの会話聞こえてないけどな」
という会話があったのをたはりアオイは知らなかった。

「ふう、食べた食べた」
「そうだねー」

「私はまだ腹6分目位だけどね」

「あれだけ食べたのにまだ入るんですか・・・」

「お姉ちゃんすごい！」

「さて、それじゃご飯も食べた事だし巡回の続きといきましょうか」

「それと案内もね」

「OKじゃあ行きましょう」

———そうして私達は巡回を続けた。

———このまま何事もなく終わればいいんだけど、それで終わらないのがアオイクオリティー

———でも、そのお話は次に続きます。

天使の霊界案内 1 - 1 (後書き)

—— 次回予告コーナー + α

アオイ「アオイです」

アオ「アオです」

アオイ「さて、次回予告をする前に、アオ、謝罪しなさい」

アオ「投稿が遅れてすみませんでした」

アオイ「まったく、約束を破っちゃ駄目でしょ」

アオ「面目ない」

アオイ「アオも反省しているようなので許してあげてください」

アオ「すいませんでした。それと、次回の投稿はいつするか未定です。

気長にお待ちください」

アオイ「さて、今回はばつとちやちやと次回予告するわよ」

アオ「やる気いっぱいだね」

アオイ「当然。はやく終わらせてアオに続きを書いてもらわないと」

アオ「頑張ります」

アオイ「それで、今回は一体何をやるの？正直このサブタイトルを二話で

区切るっていうのは普通じゃないと思うんだけど」

アオ「今回の話では主に天使の仕事で謎だった部分を少し公にしようよと

思ってた書きました」

アオイ「まあ、多少は明かしとかなないと意味が分からないものね」

アオ「そういう事もあって、今回のサブタイトルはめっちゃ空気で

アオイ「霊界案内って、全然案内してないわね」

アオ「このお話では霊界案内 + 設定紹介をしようかなと思ってたら、

事に

もの凄い字数になるって気づいたため、急遽二話で区切る

しました。最初は一話で説明し切るつもりだったのに、ど

うし

てこうなった」

アオイ「才能がないんでしょ」

アオ「そこはつきり言っちゃう?」

アオイ「そんな事より、今回は設定紹介、と、言う事は、次こそは
霊界

案内かしら」

アオ「あー、うん。そうかもね」

アオイ「何よその言い方は」

アオ「ぶつちゃけ案内するかどうか分かんない」

アオイ「ちょ、なんでよ」

アオ「いやさあ、霊界の設定がまだあんまり練れてないんだよね
ー」

アオイ「え、じゃあ次回はどうするのよ」

アオ「今回は少しバトルはあるかもしれない」

アオイ「バトル?あなたそんなの書けるの?」

アオ「多分うまく書けないだろうけど頑張る」

アオイ「そう、じゃあ頑張rinaさい」

アオ「おうよ」

アオイ「お、今回は次回予告がちゃんと出来たんじゃない」

アオ「そうだね」

アオイ「これが続けばいいんだけど」

アオ「努力しよう」

アオイ「ちゃんときっちり毎回先を見据えて話を考えていえばこんな事

は簡単なのよ。アオは行き当たりばったりすぎるの」

アオ「うっ、すみません」

アオイ「あやまらないで行動で示しなさい」

アオ『分かった』

アオイ「じゃ、最後にタイトルコール行って終わりにしましょうか」

アオ『おう』

アオイ「それでは次回、天使の仕事、第5話」

アオ『天使の霊界案内1 - 2』

『「お楽しみに!!」』

――舞台裏にて

アオイ「今回は前回より短かったんじゃないかしら」

アオ『あ、その事気にしてたんだ』

アオイ「だってどんどん長くなるっていう不幸の連鎖を断ち切りたかったのよ」

アオ『不幸って・・・』

アオイ「仕事時間が増えるのは私にとっては勘弁願いたいの」

アオ『そうですか』

アオイ「さて、終わりにしましょうか」

アオ『待てアオイ、まだ終われないぞ』

アオイ「え、何でよ」

アオ『オチが思い浮かばない』

アオイ「んなもん知るかー!」

天使の霊界案内 1 - 2 (前書き)

こんにちは、アオです。

何とか2部目が書き終わりました。

今回もタイトルは空気です。

今回は前回の後書きでも書いたように戦闘描写をいれてみました。書いてみるとこれがもの凄く難しい。戦闘描写を書いている人の凄さが今更分かりました。

自分が書いたやつは無駄に長い気がするんですが、今の实力ではこれ以上縮められません。まだまだ勉強すべき事がいっぱいです。長くなりましたが、頑張ったので読んでみてください。

因みに本編はまたしばらく投稿が出来なさそうです。(世界観設定とかで)

天使の霊界案内 1 - 2

お昼休憩をして巡回を一（案内を）再開して十数分したところで桜井君が質問してきた。

「なあ、アオイ。さっき聞きそびれたんだけど、天使って飯食う必要あるのか？」

「ん、あるに決まってるでしょ」

「天使って飯は食わないし、寝ないってイメージ持ってたんだけど」「それは偏見ね」

「じゃあ、天使もご飯から栄養摂って生きてるのか」

「それは半分正解で半分間違いいね」

「え、じゃあどういう事だ」

「天使はね、ご飯を食べて霊力を補給してるのよ」

「霊力？」

「そう、霊力」

「さっきも言ってたけど霊力って何だ？」

まあ、その疑問はもつともよね。

「霊力って言うのは、エネルギー源みたいなものよ。霊力を使って術を行ったりするの。あ、あと術って言うのは妖術とかのことよ」

「なるほど、RPGゲームでいうMPみたいなものか」

よかった、桜井君は独自の解釈で納得できたらしい。

「しかし、そうなるとアオイさんのあの食事の量は霊力を摂取するためだったんですね」

「そういう事です」

と、ミドリが町井さんの袖をクイクイと引っ張っている。

「町井さん、確かにご飯を食べれば霊力を回復できますし、霊力を消費するとお腹がすいたりしますが、ご飯を食べれば失った霊力全

てが戻るわけではありません」

「どういうことですか？」

「回復できる量はあくまでお腹に入っただけなんです」

「はい、それは分かります」

「つまりですね、霊力を使っても、使った分だけご飯が食べられるわけではないんです」

「つまり、」

「はい、アオイちゃんのあの量は地です」

「な、なるほど」

少しすると、ミドリが町井さんのところから戻ってきた。

「何話してたの？」

「町井さんの知識を深めるために、より詳しい説明をしてたんだよ」

「そうなんだ」

町井さんは知識を深めたりする事が好きそうだからミドリの詳しい説明は聞いてて楽しかっただろう。

「あ、そうだ」

と、また桜井君は疑問に思う事があつたのだろうか、質問したそうな顔をしている。

まあ、知識欲旺盛なのはいいことだと思うけどね。

「全然疑問に思ってたんだけどさ、俺達は飯食う必要あるのか」

自分は私達みたいに霊力を消費していない、だったら霊力の補給は必要ないんじゃないか、桜井君が言いたい事はその辺りだろう。

「それがね、必要あるのよね」

「え、でも俺は術とかは使えないし使った覚えもないんだけど」

「実はね、霊体の維持にも多少の霊力が必要なのよ」

ここは死後の世界、ならば死んだ人は普通にいられる。そう思っていたのだろっ、とても驚いた表情をしている。

「な、俺達の体の維持にも霊力を消費してるのか。っていうか、体の維持ってどういうことだよ」

「そのままの意味よ。人はね、死んだ後は魂だけの存在となるの。そして、魂の情報を媒介にして生前の自分の体を形成しているのよ。つまり、体の維持に霊力が必要なのは、魂から情報をインストールして体を形成するためだからよ」

「む、なるほど」

桜井君は少し難しそうな表情をしているけど、要点さえ理解してくれば問題はない。

「そうそう、霊力の回復には食事以外にも睡眠とかでも出来るわよ。ただ、一番手っ取り早いのが食事による補給だから主にこつちを皆するけどね」

「ふーん」

もう頭の容量がいっぱいになってきているのか、返事も少し雑になっている。

「まあ、聞くだけで理解するには時間が必要だからもうこの話は終わりにしましょうか」

「あ、ああ。ありがとう」

「どういたしまして」

天の声：詳しい事は世界観設定にて載せる予定ですので詳しく知りたかったらそちらをお読みください。

「あれ、今なんか電波が・・・」

「そうだねー」

「私も聞こえたような気がしたな」

「き、気のせいじゃないかしら」

「うーん、気のせいかな」

「気のせいかもねー」

「そういう事にしましょうか」

「そうですよ。そういう事にしましょう」

ふう、何か変な汗が流れたわね。

と、私達が何か変な電波の被害を受けて少しした時、

「あぶない！」

「え？」

ヒュン！

いきなり桜井君に飛んできた何かを、私は手を引いて避けさせた。
今のは、霊力弾。

「ち、外したか」

「！」

声のした方向に振り向くと、そこには一人の姿が見えた。

「いきなり攻撃を仕掛けてくるなんて随分なご挨拶じゃない」

「知らないのか、世の中先手必勝なんだぜ」

「まあ、それは知ってるけど、何か用かしら」

そう言つて私は軽く身構えた。ミドリもそれに倣つて少し身構えた。

「おいおい、そんなに警戒しないでくれよ」

「あんな事されたら誰だつて警戒すると思うわよ」

「まあ確かにそうだが、あんた、天使だろ、人間相手にそこまで余裕がないのもどうかと思うぜ」

「あら、あなたの目には私に余裕がないように見えるのかしら」

「くく、見えるねえ」

私達天使に危険だと感じられた事が嬉しいのか、相手は少しご満悦だ。

「まあ、仮にそう見えるとしても質問には答えて貰えるかしら」

「ああ、俺の用だったか」

相手は少しもつたいぶっている感じた。まあ、大体は見当がついてるんだけど。

「お前達の羽を貰いに来た」

やっぱしそうだったか。

と、桜井君がいきなり攻撃された事への不満も込めてか、少しいらついたように聞いた。

「羽を貰いにつて、どういうことだよ！」

すると、相手が怪訝な顔をした。

「は？どういう意味って、お前もそういうつもりでこいつらに近づいたんじゃないの？」

何を言っているんだコイツ、というような感じた。

「そういうつもりって、どういう」

「まって桜井君、私が説明するわ」

私が止めると桜井君も少し落ち着いてくれた。

「天使の羽はね、簡単に言うともっとも高価なの。ちょっとした天使の羽だったら直ぐに転生分のポイントが溜まるのよ」

「な、」

「それに、身も蓋もない事を言えば、天使は羽があるからこそ天使なの。逆に言うとな、羽があれば誰でも簡単に天使になれるのよ」

「そ、それじゃあお前も」

そこで私は首を振った。

「違うわよ。私は自力で天使になったの。今のはただの一例、天使の羽がどれだけ重要かを知ってもらうために言ったのよ」

「は、はは、そうか。そうだよな。悪い、アオイ。今お前の事を一瞬疑った」

「別にいいわよ」

そして説明を終えて、私が相手に向き直ると相手は心底驚いたような表情をしていた。

「まさか、本当に知らないとはな。だとしたら何でお前らは天使と一緒に居るんだ？」

すると、相手の疑問に町井さんが割ってはいって答えた。

「そんなのは簡単だ。私達は君達とは違って羽目的ではなく、知り合いとして行動を共にしていただけだ」

「そうか、しかしそれは天使の羽がどれだけ高価か知らなかったからだ。今は天使の羽の価値を知っているだろう、それでも羽には興味がないと？」

すると町井さんは一切の躊躇せずに言った。

「無いな。それに、私達はアオイさんには恩がある。まあ、それがなくても興味は無かっただろうけどね」

「っておい、勝手に決めるなよ先生」

「なんだ、お前は興味があったのか」

「羽の価値には興味はねえよ。だけど、羽の綺麗さには興味があるぜ」

「ふん、それでこそ私の生徒だ。分かっているじゃないか」

町井さん達の回答が面白くなかったのか、相手は鼻を鳴らした。

「まあいい。お前達が興味はあろうと無かろうと関係ない。羽を奪うだけだ」

「そう簡単にいくかしらね」

「おいおい、そんな羽の大きさを強気な口調をだな」

「へえ、知ってるんだ」

「もちろんだ。天使の霊力の高さは羽の大きさに比例する、だろ？」

「正解よ」

「て、おい。お前の羽の大きさとどれくらいだ？」

「今は平均より少し小さめかしら」

「それやばいじゃん！」

「大丈夫よ、あんな格下、平均より少なくとも余裕よ。それにこっちにはミドリがいるしね」

「任せてよ、アオイちゃん」

「おいおい、まさか人間が一人で天使を相手にするとでも？」

すると、男のほかに三人出てきた。因みに全員男だ。

「ふう、か弱い少女二人に男四人がかりって恥ずかしくないの？」

「いくらか弱いつつても相手は天使だからな。これ位は用心するさ」

うーん、この場合だと単純計算で一人で二人相手にしなきゃいけないのか、面倒くさいなあ。

「あ、面倒だと？」

いけない、つい声に出しちゃったようね。

「ふう、それじゃ桜井君と町井さんは下がってて」

「いや、俺達も、「黙ってなさい」・・・はい」

二人を後ろに下がらせて準備が整った。

「じゃあ、始めましょうか」

その言葉を合図に、四人が一斉に霊力弾を撃ってきた。

「はっ！」

手を前にかざして霊力の盾を展開し、全てを防いだ。

「おらあ！」

「残念ね」

横から来た拳を難なくかわす。

「みんな、お願い！」

ミドリからの援護が来た。

ミドリの得意な術は妖術、妖精を実体化させて今私のところに来た男に向かわせた。

「喰らいなさい！」

あつちをミドリに任せて私は三人に向かって聖術を発動した。と、私が指定した空間に火柱が立った。

「ありや、外しちゃったか」

私は少し間の抜けた声を出したが、相手はそれに反応しなかった。いや、出来なかった。

「な、こ、殺す気かよ！」

「何よ、そっちが仕掛けてきたんでしょ。安心しなさい、運がよければ生きてるかもだから」

「くそ、なめやがってえ！」

そう言つて、また三人は私に霊力弾を撃ってくる。私は盾を展開して防いだが、相手は構わず撃ち続けてた。

「ふう、馬鹿の一つ覚えね」

もしかして彼らは霊術しか使えないのかしら。と、いきなり攻撃がやんだ。

「落ち着け、これは俺達をいらつかせてその隙をつく作戦だ」

ありや、ばれたか。

「へえ、よく分かったわね。ただの馬鹿じゃないって事ね」

「く、その余裕、今すぐ無くしてやるよ」

「出来るかしらねえ、あなた達ごときに」

そこでミドリが相手をしている人を見ると、まだやっていた。まあ、今回はミドリも戦闘用の妖精を連れていなかったんだろう。巡回の仕事なのにそれもどうかと思うけど。

と、そんな事を考えていると、相手は体制を立て直したようだ。どうやら、まだ楽しめそうね。

「ふっ！」

横から来た霊力弾を体を屈めてかわす。するとその後に四方八方から弾が飛んできた。

「まったく」

私が半球状の盾を張ってやり過ぎすと、相手が接近してきた。

「おらあ！」

相手が盾を殴りつけると盾が割れて私を守るものが無くなった。

「やつ！」

私が空を飛ぶと、それを追いかけるように弾が飛んできた。

「伊達に趣味が空中散歩じゃないわよ！」

私は追いかけてきた弾を全てかわして反撃に出た。

「燃えなさい」

今度は横に炎を走らせて相手の動きを止めた。

私は相手が止まった瞬間、急降下して地面に降り立ち相手の懷に潜り込んだ。

「やあ！」

手には霊力で作った切れない剣、しかし切れないといっても要は木刀みたいなもので打撃には優れている。そしてそれを相手に打ち付けて一人を気絶させた。

「さて、あと二人ね」

二人は私が急降下して懷に潜り込んだ瞬間に反応して距離をとった

ので、気絶させられたのは一人だけだった。

「ふん」

相手も自分の手に剣を作り構えた。——きつとあっちの剣は私のとは違って切れるやつだろう。

「せい！」

私が踏み込むと二人も反応して私が振る剣に自分の剣を合わせた。

——本来剣とは1対1でその真価を発揮し、2対1ともなるとかなりきついのだが、私は別に平気だった。戦いとは攻める事、2対1で不利だろうとも相手が攻撃してこない限り負けることは無い。だから私の撮るべき手段は一つ、相手に反撃させなければいい。だから私の撮るべき手段は一つ、相手に反撃させなければいい。横払い、袈裟切り、上段、胴、頭、とにかく私は攻撃し、決して受けに回らないようにした。

「くそ、何で天使が剣なんて扱うんだよ」

「おあいにく、今の天使は弓だけしか扱えないようじゃ駄目なのよ！」

相手は接近戦に少しは自信があったようだが、私が攻めに回っているので攻撃できずにいた。

——この隙は逃さない。

「終わりよ！」

私は至近距離で霊力を力任せにとばして、相手を吹き飛ばした。

そしてその隙に相手に素早く近づき弾を飛ばして怯ませる。そして怯んだ相手に魔術をかけた。魔術をかけて数秒、相手は意識を刈り取られて気を失った。

「ふう、おわりっ」と

ミドリの方を見ると、あっちも終わっていたようで、手を振っていた。

「アオイちゃん、お疲れ様」

「ミドリもね」

すると、桜井君達が近づいてきた。

「お疲れ様、アオイ。凄かったな」

「ありがとう」

「お疲れ様です。あの、アオイさん、この人達はとうするんですか？」

「本部に連れて行くわ」

こいつらを本部に連れて行けば相応の罰を受ける事になるだろうが、それは自業自得だ。

「じゃあ、今日はこの人達を本部に連れて行ったら終わりにしましょうか」

「いいのかよ、それで」

「別に問題ないわ。天使は私達以外にもいるし、後は夜勤の天使に任せましょうか」

「もうそんな時間か」

今日はお昼が遅かったため、もういい時間になっている。これで本部に行ったら仕事が終わる時間になっているだろう。

「じゃあ、行きましょうか」

「そうだねー」

私は霊術を使って4人を持ち上げた。

「私も手伝おうか？」

「大丈夫よ、これくらい」

「なんか、凄いなアオイは」

「え、何がよ」

「3人を相手にしても無傷で勝って終わった後もケロッとしてるしな」

「ああ、これ位のレベル相手に負けそうになってちゃ流石に天使としては拙いからね」

「俺、天使にだけは喧嘩売らないようにするよ」

「賢明な判断ね」

「と、話が逸れたわね、早く戻りましょう」

「分かった」「はい」

そうして私達は今日一日の仕事を終えて、本部へと戻った。

あの4人を本部に引き渡すと、私とミドリ二人にポイントが入った。やっぱりいい事はするものね。

「じゃあな、アオイ。今日は最後が大変だったけど楽しかった」

「またね、今回はあんまり案内が出来なかったから次があるなら今度はちゃんと案内するわね」

「ああ」

「アオイさん、お疲れ様でした。今日は中々刺激的でしたね」

「すいません、巻き込んでしまつて」

「いえ、気になさらないでください」

「お姉ちゃん、かつこよかったよー」

「ありがとう、絵美ちゃん」

「それでは、さようなら」

「はい、さようなら」

私とミドリ二人で桜井君と町井さん達を見送つて二人になった。

「じゃあアオイちゃん、私も帰るね」

「うん、お疲れ様、ミドリ」

「アオイちゃんもね」

「じゃあね、ミドリ」

「バイバイ、アオイちゃん」

ミドリとも分かれて私は一人となった。

さて、今日の天使としての仕事は終わりにして、もう一仕事しようかしらね。面倒くさいけど。

そうして私は歩を進めて目的の場所へと向かった。

—— 某時刻、某場所にて

夜になり、辺りは暗くなっている。さらにここは普通の所よりさらに暗いので、闇と言える暗さだ。

何も見えない、これなら私の仕事もやりやすいし、これはこういう暗がりでこそやる仕事だろう。といつてもまあ、今からするのは殆

どボランティアみたいなものだけど。

「さて、もう出てきてもいいわよ」

目の前に一つの気配が現れる。目が見えないので気配でしか感じ取れないが確かにいる。

「わざわざこんな暗がりに来てあげたんだから今からする質問には答えてもらうわよ。といっても、答えは殆ど分かりきっているんだけど」

闇が微かに反応した。という事は、答える気はあるのだろう。

「じゃあ聞くけど、あの4人に羽のことを吹き込んだのはあなたかしら」

「・・・」

「確かに天使の羽は高価だけど、その情報は秘匿されている、そんな情報をあんなやつらが知っているのはおかしい、だったら教えた人がいる。・・・私の推測はこんな感じだけど、どう、難何点かしら？」

「・・・それで、仮にそうだとしてお前は私をどうするつもりだ」

「決まってるでしょ」

そこで私は一呼吸いれ、

「私は私の仕事をする」

すると闇が少し笑ったような感じがした。・・・見えないので感じがしたただけど、笑ったはずだ。

「ふん、そういう台詞は自分の状態を確認してから言うべきだな」

「何？あなたも相手を見た目だけでしか判断できないの？あの4人も私の羽の大きさを見て舐めて掛かった結果、負けたのを覚えてないの？」

「ふん、しかしその羽の大きさならば私でも倒せるレベルだ」

この口ぶり、コイツ、何人かと相手してるわね。

「それに、あの3人相手に随分と余裕も無かったじゃないか」

「ああ、あれね。簡単よ、手加減してただけ」

本当に手加減してただけなのでさっさと言う。

「手加減だと？」

「そうよ、何？もしかしてあれが私の全力だと思ってた？なら残念ね」

その言葉と同時に私は羽を大きくした。
すると、闇が微かに怯んだ声を出した。

「天使はね、自分の靈力以上に羽を大きくする事は出来ないけど小さくする事は出来るの。私はあっちの方が楽だから羽根を小さくしてるだけ」

「・・・」

「理解できたかしら」

「ああ、理解はした。しかしお前は自分の仕事をすると言ったな。ならばおまえがやるうとしている事は天使がする仕事ではない。私はなにも悪い事はしていない。つまり、罰する理由が無いという事だ」

確かにコイツは自分では何もしていない。あの情報だって秘匿はされているが、話したからといって懲らしめるレベルではない、というか特に罰則は無い。つまり、天使はコイツに手を出せない。

——けど、

「残念ね」

「何がだ、俺を捕まえられない事か？」

自分が捕まらないと思いい調子に乗っているのか、声には喜悦が混じっている。

「別に天使だってペナルティ覚悟で行けばあなたを懲らしめる事くらい出来るわよ。まあ、私はペナルティは受けたくないからやらないけど」

「ふん、そうか。なら私は帰らせてもらっよ」

「ちよつと待ちなさいよ、まだ話は終わってないわ」

「何かな？」

「さっき、私は私の仕事をするって言ったでしょ」

私は天使としてコイツを相手にするつもりは無い。ペナルティとか

もあるし。でも、天使でないならコイツを相手にすることが出来る。

「では何をするのかな」

「私は私の仕事をする」

——そう、私の仕事

「——死神としてのね」

天使の霊界案内 1 - 2 (後書き)

—— 次回予告 + α

アオイ「次回予告コーナー」

アオ「はっじまつるよー！ー！！」

・・・

・・・

アオ「またこういう出だしか」

アオイ「やっぱりこれくらいのテンションがナイトやって行けないと思う」

のよ

アオ「でもこれ結構イタイテンションだから恥ずかしいんだよね」

アオイ「頑張つて」

アオ「別にいいけどさ、一回言う方を逆にしない？」

アオイ「それっていいって言うのかしら」

アオ「そんな細かいことはいいから、はい行くよ」

—— Take 2

アオ「次回予告コーナー」

アオイ「はっじまつりまー！ーす！！」

アオ「・・・」

アオイ「・・・」

アオ「さあ、始めようか」

アオイ「スルーしないでよ！！！！？」

アオ「さて、とりあえず今回も内容について話そうかな」

アオイ「うう、ひどい」

アオ「ほら、アオイ、仕事しなさい」

アオイ「やだ、反応返してくれなかったから」

アオ「分かったよ、反応してあげるから・・・」

アオイ「じゃあして」

アオ「かなーリイタかったな」

アオイ「傷口に塩を塗りたくるような事を言うなー!!」

アオ「ほら、返したんだから仕事をしなさい」

アオイ「うっ、鬼畜」

・・・

・・・

アオイ「そういえばさ、今回も相変わらずタイトルが空気だったわね」

アオ「案内全然してなかったよな」

アオイ「そして霊界案内1-1、あれの最初がすごく気になるんだけど」

アオ「あの仕事の量のこと？」

アオイ「というか、私が仕事をやってるシーンの事ね」

アオ「あれがどうかした・」

アオイ「あれ、いらないんじゃないの」

アオ「そんな事は無い。あれは絶対に入りたいと前回から思ってた事だ」

アオイ「でもあんなの書かなければ私はあんな量の仕事をやらずにすん

だよ!!」

アオ「ああ、その事ね」

アオイ「私が、どれだけ辛い思いをした事が・・・」

アオ「ミドリのいい人ぶりがとてつもなく発揮されてたね」

アオイ「本当よ。どっかの誰かさんとは大違いね」

アオ「そうだね、どっかの天使とは違って仕事熱心だよな」

アオイ「・・・」

アオ「・・・」

アオイ「まあ、上段はこれ位にしましょうか」

アオ「そうだね。話が全然進まない」

アオイ「ちよつと休憩しましょう。お互い疲れてるのよ」

アオ『いいね、さんせー』

アオイ「それじゃ、休憩が終わったらすぐに始めましょうか」

～休憩中～

アオ『さて、今回は新しい挑戦をしてみました。それが何か分かるかな』

アオイ『

戦闘描写があるんでしょ』

アオ『その通り、初めてだったからうまく書けたかどうか不安だけど』

アオイ「何か参考にしたりとかしてないの？」

アオ『してないね。でも、これまでに幾つか戦闘描写がある小説は読ん

だ事があるから、それらを軽く思い出しながら書いてはいただけど』

アオイ「それは参考にしたっていうんじゃないかしら」

アオ『そうだね』

アオイ「ふう、とりあえず次に行きましょう」

アオ『今回は戦闘描写のほかに設定とかをたくさん書いたね』

アオイ「そうね。正直話の整合性とかがちゃんととれてるのか心配になる

位に書かれてたわね」

アオ『そこで、皆様にお伝えしたい事が』

アオイ「何」

アオ『本編はまたもや投稿をお休みしたいと思います』

アオイ「え、なんでよ」

アオ『設定とかキャラ紹介とかを更新するため』

アオイ「ああ、今回はメチャクチャ設定が明らかになったもんね」

アオ 『でも、あれらはオマケなので設定とかの執筆と平行して本編も書

きたいと思っています』

アオイ「じゃあ休む必要ないじゃない」

アオ 『一応保険としてね』

アオイ「うわー、せこ」

アオ 『でもあくまで保険であってちゃんと並行執筆はしたいと思
って

います』

アオイ「そこまで言うんなら頑張りなさい」

アオ 『任せなさい』

アオイ「あ、そうだ。なんか最後が結構気になる終わり方してたわ
ね」

アオ 『ああ、あれね』

アオイ「何、あれは伏線？」

アオ 『まあ、みたいなものだね』

アオイ「中々気になる終わり方するじゃない」

アオ 『でも次話にはまったく影響しないけどね』

アオイ「そうだ、次回予告」

アオ 『忘れてたのか・・・』

アオイ「う、うるさい。そう言うからには次回の構想はもう考えて
ある

んでしょうね」

アオ 『まあね』

アオイ「あら珍しい」

アオ 『仮にもここは次回予告をする場所だからね』

アオイ「最初はそれをうまく使えなかったくせに」

アオ 『だがもう今は違う!』

アオイ「言ったわね」

アオ 『・・・事も無い』

アオイ「うわ・・・」

アオ「と、とりあえず次回予告をするよ」

アオイ「まあいいわ。それで、今回はどんな話かしら」

アオ「タイトルはまだ決まってるけどアオイの友人を出すつもりだ」

アオイ「それってミドリじゃない人？」

アオ「そうそう。新キャラだね」

アオイ「OK、他には」

アオ「・・・お楽しみということだ」

アオイ「なに、もしかしてこれだけ？」

アオ「・・・」

アオイ「・・・」

アオ「えらそうな事言ってますでした」

アオイ「うんうん、謝る事は大事よね」

アオ「まあ、とりあえず今回はその新キャラと一緒に仕事をするような」

話になります」

アオイ「ふう、もうそれでいいか」

アオ「じゃあもうそろそろ終わりにしようか」

アオイ「分かったわ」

アオ「それでは次回、」

アオイ「天使の仕事、第7話を」

「お楽しみに！！」

——舞台裏にて

アオイ「あ、そうだ。一話目と二話目のタイトルはどうしたの？」

アオ 『ああ、あれね。あれはあのままで行く事にした』

アオイ 「なんでよ」

アオ 『考えてたらあのままでいつか、みたいな感じに思いました』

アオイ 「うわ、てきとー」

アオ 『それに、タイトルに困った時に使えるし』

アオイ 「どんな感じ？」

アオ 『天使の仕事 2 - 1、みたいな感じ』

アオイ 「かなりせこいわね」

アオ 『まあ、そんな訳であればあのままにしようと思っています』

アオイ 「もうそれでいいか」

アオ 『よし、さっさと引き上げるぞ』

アオイ 「どうしたの？」

アオ 『後書きの長さが半端無い事になってる』

アオイ 「え、そうなの。ってうわ、本当だ」

アオ 『という訳でさっさと退散しようか』

ダーーーーー！！ ↑ 全力で逃げてる音

アオイ 「ってはや！こらー！待ちなさいよー！」

お知らせ

申し訳ありませんが、この度、『天使の仕事』を『天使の仕事（旧）』と名を改め、新しく『天使の仕事』を書きたいと思っています。

これだけでは分かりづらいですので簡単に言いますと、今の『天使の仕事』の名前を『天使の仕事（旧）』と名を改めまして、新たに『天使の仕事』という小説を書くということです。

ここまでに至った経緯を申し上げますと、今の『天使の仕事』は大変読みにくいと知人から指摘され、もっと読みやすくしろ、と言われたので、では読みやすく書こうと思いどうすればいいかと考えた結果、思いついた案は今の状態では無理だと思い、改名して新たに書くことに致しました。

読者の皆様には自分勝手な考えで申し訳ありませんが、この小説はこれで完結とさせて名を改めてます。

次に書く『天使の仕事』は全体的に読みやすく致しますので、暇な時にでもお読み頂けたら幸いです。

尚、次の『天使の仕事』は最初にこの小説の1〜6話までを読みやすく直したものの投稿します。（まえがき、あとがきも変えずに残したまま、少し加筆修正をして投稿します）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8570s/>

天使の仕事（旧）

2011年10月8日14時55分発行